

山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第5集

八乙女塚古墳(馬乗山1号・2号墳)・口開遺跡

山 梨 県 中 央 自 動 車 道
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

1 9 8 5 . 3

山梨県教育委員会
日本道路公団

八乙女塚古墳(馬乗山1号・2号墳)・口開遺跡

山 梨 県 中 央 自 動 車 道
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

1 9 8 5 . 3

山梨県教育委員会
日本道路公団



八乙女塚古墳（馬乘山1号・2号墳）

序

本報告書は、中央自動車道建設に先立って発掘調査した一連の遺跡のうち、1980年に実施した山梨県東八代郡境川村地内の八乙女塚古墳と口開遺跡について、その成果をまとめたものであります。

境川村は甲府盆地の南東縁に位置し、埋蔵文化財の豊富な地域で、現に昨年度は平安時代中・後期を中心とする石橋条里制遺構の詳細な調査報告書が刊行せられております。とくに大小の古墳の集中地域として知られ、西方は銚子塚古墳を始めとする中道町の古墳群と、東方は八代町の銚子塚古墳などの古墳群と続く、本県を代表する古墳文化の中枢地帯を形成しております。

八乙女塚古墳とは、馬乗山1号墳・同2号墳の2つの古墳を指し、曾根丘陵の東端、笛吹川支流の境川と芋沢川とに挟まれた台地上、標高300m余に立地しております。1号墳は5世紀中葉ごろに築造された円墳で、4基の組合せ式石棺が認められ、その1号棺からは剣・直刀・刀子・鉄鎌等が出土いたしました。また2号墳は5世紀後半に築造された前方後円墳で、出土の須恵器片の編年から、5世紀後半以後6世紀前半ごろまで追葬乃至祭祀が行われたことが推定されます。両古墳とも周辺古墳群と相まって、中道町の銚子塚古墳築造者に代る新興勢力層の勃興・発展の過程を知る好資料と考えられます。

次に口開遺跡は、口開塚古墳に隣接して存在し、溝状の遺構1つが確認され、そこから壺形土器1点が出土したことから、弥生時代後期の方形周溝墓であった可能性が高く、古墳成立前この地に1つの勢力がすでに存在したことを想定させます。

本報告書が、周辺諸遺跡の発掘成果とともに、当該地域の古代文化解明の1資料としてご利用いただけますよう期待いたしております。

末筆ながら、石棺の材質を調査していただいた山梨大学の西宮克彦教授、種々ご協力を賜わった関係機関各位、直接発掘調査に当たられた方々に改めて厚く御礼申し上げます。

1985年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 磐貝正義

例 言

1. 本報告書は、昭和55年度に日本道路公団東京第二建設局から委託されて、山梨県教育委員会が実施した東八代郡境川村藤垈字八乙女に所在する八乙女塚古墳、同三柵口開遺跡の発掘調査報告書である。
2. 八乙女塚古墳については、付近に同名の古墳があり、かつ研究史に即して馬乗山1号墳、2号墳として記述した。また口開遺跡は、当初口開塚古墳として調査したが、古墳には直接かからず周溝状遺構が確認されたため、口開遺跡として報告する。
3. 本報告書作成の経費は、昭和59年度に日本道路公団東京第二建設局と山梨県教育委員会の契約による。
4. 出土品等の整理は、坂本美夫、米田明訓、渡辺儀訓、野田昭人を中心に行なった。
5. 本書は坂本美夫、米田明訓が分担執筆し、その文責を文末に記した。馬乗山1号墳の石材については、山梨大学教授理学博士西宮克彦先生に執筆していただいた。
6. 写真撮影は、遺跡を坂本、米田が、遺物を塚原明生が行なった。編集を坂本、米田で行なった。
7. 本報告にかかる出土品及び記録図面、写真等は一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。
8. 出土品整理参加者
若尾澄子、弦間千鶴、小林ちゑ子、和田宏美、後藤良美、広瀬勝子、弦間文代、渡辺節子、平出知恵子、小笠原睦子、土肥正治

目 次

第 1 章　はじめに.....	1
第 1 節　調査事務.....	1
1. 発掘調査事務経過.....	1
2. 調査組織.....	1
第 2 節　周辺地域の状況.....	1
1. 遺跡の位置.....	1
2. 地理的環境.....	2
3. 歴史的環境.....	2
第 2 章　遺跡の概要.....	2
第 1 節　古墳研究小史.....	2
第 2 節　遺跡の現況とトレンチ位置.....	4
第 3 節　馬乗山 1 号墳.....	9
1. 墳丘・石室構造.....	9
2. 遺物の出土状況.....	16
3. 出土遺物.....	16
4. 小結.....	17
第 4 節　馬乗山 2 号墳.....	17
1. 墳丘・石室構造.....	17
2. 遺物の出土状況.....	25
3. 出土遺物.....	27
4. 小結.....	28
第 5 節　特殊遺物の調査研究.....	29
第 6 節　口開遺跡.....	31
1. 遺跡概要.....	31
2. 遺構.....	31
3. 出土遺物.....	32
第 3 章　おわりに.....	33

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	3
第2図 馬乗山1・2号墳トレンチ設定図	4
第3図 馬乗山1号・2号墳現況平面図	5
第4図 馬乗山1号・2号墳全体図	7
第5図 1号墳全体図	9
第6図 1号棺平面図	10
第7図 1号棺展開図	11
第8図 2号棺平面図	12
第9図 2号棺展開図	12
第10図 3号棺展開図	13
第11図 4号棺展開図	13
第12図 1号墳石棺配置図	14
第13図 1・3・4号棺セクション図	15
第14図 2号棺セクション図	16
第15図 1号棺遺物出土（昭和42年）状況概念図	16
第16図 出土遺物（昭和42年出土品）	17
第17図 2号墳全体図	19
第18図 2号墳葺石状況図	20
第19図 1・2号墳セクション（東西）及び2号墳セクション（南北）図	21
第20図 2号墳セクション図（南北）	23
第21図 後円部遺物出土状況図	25
第22図 出土遺物(1)	26
第23図 出土遺物(2)	27
第24図 口開遺跡位置図	31
第25図 周溝状遺構平面図	32
第26図 出土遺物	33

図版目次

- 図版1 (1) 馬乗山1号・2号墳遠景（南方より）
(2) 同上
- 図版2 (1) 1号墳第1号棺開口状況（南方より）
(2) 同上、第1・2・4号棺（南方より）
- 図版3 (1) 1号墳全景（南方より）
(2) 同上、第1～4号棺配置状況（西方より）
- 図版4 (1) 1号墳第2号棺
(2) 同上
- 図版5 (1) 1号墳第2号棺蓋石撤去後（南方より）
(2) 同第3号棺（南方より）
- 図版6 (1) 1号墳第1号棺鉄鏃出土状況
(2) 昭和42年出土鉄鏃
- 図版7 (1) 昭和42年出土鉄鏃
(2) 同上、直刀、剣
(3) 同上、刀子
- 図版8 (1) 2号墳東西トレンチ状況（東方より）
(2) 同上
- 図版9 (1) 2号墳北斜面葺石状況（西方より）
(2) 同上（北方より）
- 図版10 (1) 2号墳南斜面くびれ部付近遺物出土状況（南方より）
(2) 同上、須恵器甌出土状況
- 図版11 (1) 2号墳出土甌
(2) 同上、甌
- 図版12 (1) 2号墳出土底部穿孔土器
(2) 同上、茶碗
- 図版13 (1) 口開遺跡遠景（西方より）
(2) 同上、方形周溝状遺構
- 図版14 (1) 方形周溝状遺構遺物出土状況
(2) 同上、壺

第1章 はじめに

第1節 調査事務

1. 発掘調査事務経過

昭和55年3月26日 日本道路公団と発掘調査の概算見積、工程について協議する。

4月1日 日本道路公団より県教育委員会へ発掘調査委託契約の協議書が送付される。

契約を締結する。

6月26日 文化庁に発掘通知を提出する。

7月1日 発掘調査を開始する。

9月6日 発掘調査を終了する。

なお調査終了後石和警察署へ発見通知を提出する。

10月31日 文化庁より県教育委員会へ発掘通知の受理通知書が送付される。

2. 調査組織

調査主体 山梨県教育委員会

調査担当者 坂本美夫・米田明訓（県文化財主事）

調査員 山路恭之助（現須玉町教育委員会）、香月利文（日本大学OB）

調査補助員 桑原敏、樋口強司、滝本肇、小林厚美、荻原俊文、飯田文恵、渡辺儀訓、安達有紀、有岡博之、野田昭人

作業員 弦間賢二、若尾澄子、仲田せい子、石川貴子、名取とも子、岩沢臼、宮川明子、荒木邦明、金丸克夫、広川健慈、中込秀樹、芦沢恭子、中平牧也、恒川和子、小林秀行、深沢和夫、中山妙子、山本修、安達比呂子、斎藤靖之、尾崎実、渡辺広江、白井満、篠原悦子、斎藤つね子、角田英司、秋山俊一、藤田健二、神門賢治、藤川健、望月貴美子、白倉尚志、丸山憲二、篠原ひろ子、三枝茂夫、斎藤和彦、関口純一、中込美佐子、上田智子、別府信治、田中広江、渡井日美子、赤池広美、古屋茂美、小野綾子、神座恵、橋田一女、加藤敦史、城之内みゆき、乙黒幸年、佐藤敦、渡辺広江、橋田武徳、橋田和美、高野俊裕、坂本修、高野守、橋田節雄、中込達也、成島秋彦、近藤貴明、成宮達仁、石部司、高木誠、其田弘毅、山本一臣、大沢武、三嶋恵子、雨宮健治、水口章、石田真功、山口小百合、中島学、斎藤昭、名取義章、土橋由美、小林かおる、小林初音

第2節 周辺地域の状況

1. 遺跡の位置

馬乗山1・2号墳および口開遺跡の所在する東八代郡境川村は、甲府盆地南東部の概して丘陵地域に位置する。甲府駅より南々東約8.5kmの距離である。南西部を中道町、北西部を中

道町および石和町、北東部を八代町、南東部を芦川村に接する。また南東部には御坂山地がせまり、北西部には笛吹川が南西に流れる。

2. 地理的環境

甲府盆地南東縁にほぼ沿うように、北東から南西に向って流れる笛吹川の左岸には、沖積地を挟んで東西約12.5kmの曾根丘陵が続く。この曾根丘陵は御坂山地の前面に展開する標高270～450mほどの丘陵で、本村はその東端部を形成する地域である。丘陵の前縁は急激に平地となる沖積地に落ちこんでいる。その比高は本村付近で40～120mほどとなる。

本村には御坂山地に源を発する境川、芋沢川、間門川などの中小河川があり、笛吹川に流れこむが、この間に丘陵を侵蝕し小規模な舌状台地を形成する。

馬乗山1号、2号墳は境川と芋沢川に挟まれた地域に形成された幾つかの舌状台地の最も東寄りの縁辺部に立地する。標高300mほどで、平地との比高差は40mばかりである。また口開遺跡はこの台地の下の傾斜変換線付近に見られる低丘上、標高268m付近に立地する。

本村地域に見られる岩石のおもなものは、玄武岩、石英安山岩、石英閃緑岩などとされている。

3. 歴史的環境

本墳は曾根丘陵の東端の舌状台地上に位置するが、本丘陵と本墳の東方に展開する準丘陵地帯は、先土器時代以降の遺跡が濃厚に認められる。本村は中でも弥生時代以降の遺跡が多い。

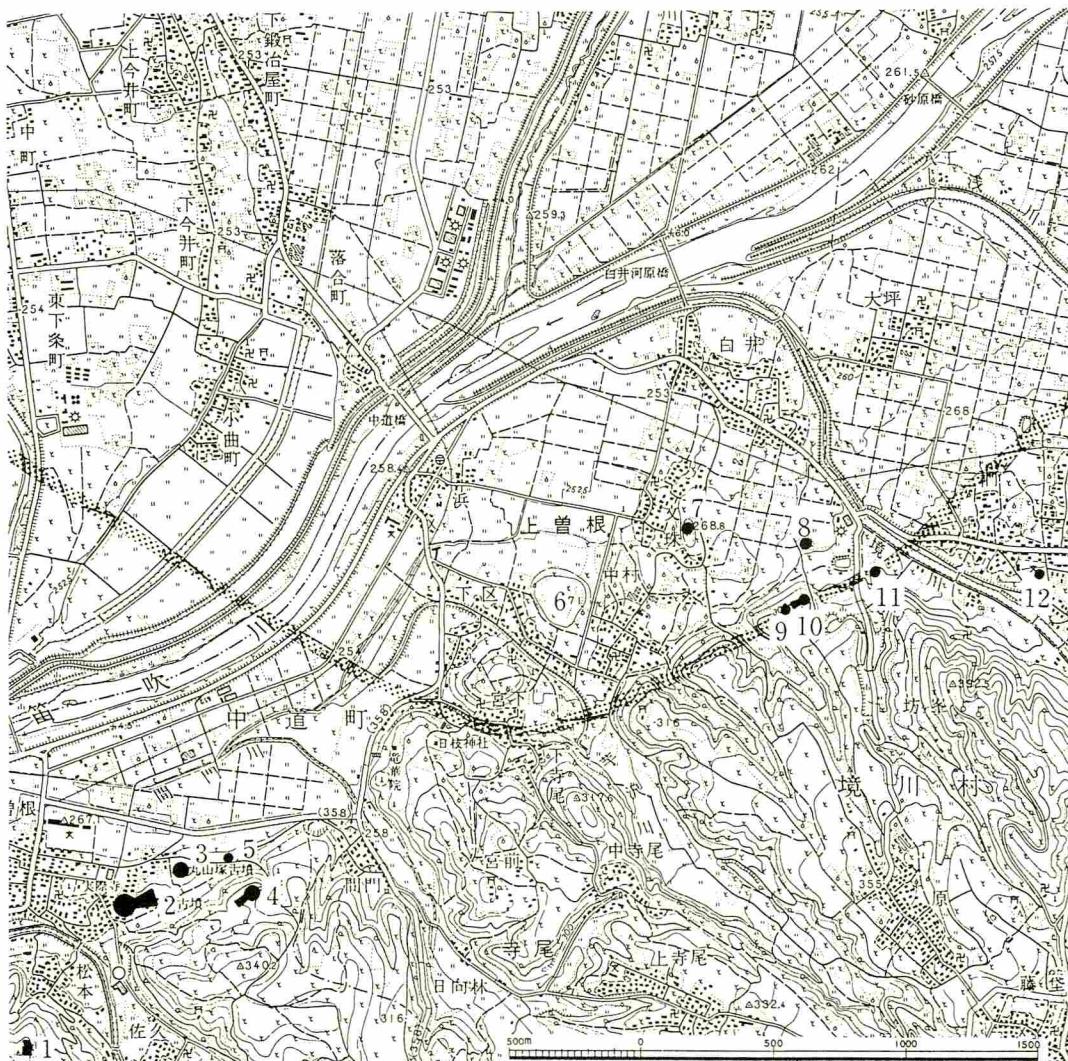
古墳に関して見ると、口開遺跡の頂上に口開塚古墳（横穴式石室）、眼下に八乙女塚古墳（帆立貝式、竪穴式石室）、文珠古墳（円墳）、川久保古墳などが本墳に近接して存在する。また本村には小黒坂一之沢、同四石田あたりに小古墳が集中しており、本村には57基ほどの古墳分布が見られる。また西方には中道町銚子塚古墳、丸山塚古墳、大丸山古墳など、本県を代表する東山古墳群が、また東方には八代町銚子塚古墳など、本墳に先立つ古墳が見られ、本墳はそのちょうど中間地域に存在する古墳といえる。

古墳時代の遺跡には、京原遺跡（4世紀）、薊在家遺跡（6～7世紀）が後背地に、奈良～平安時代の遺跡には石橋遺跡が調査され、報告書が刊行されている。また本村には口開遺跡の南斜面に向山窯址、藤垈の牛居沢窯址などの古墳時代以降の窯址が所在する。

第2章 遺跡の概要

第1節 古墳研究小史

本墳に関して過去幾つか触れたものがある。しかし、古墳名や墳形については統一制がなく、若干の整理をしておきたい。昭和42年に大久保栄一氏によって発見されたが、当初は付近を馬乗山とする俗称から馬乗山古墳と名付けたようである。その後、小字名の八乙女を取り八乙女山1号墳あるいは八乙女塚古墳と称する例が見られるようになった。この時期と合せて墳形も



第1図 遺跡位置図

- 1. 小平沢古墳
- 2. 銚子塚古墳
- 3. 丸山塚古墳
- 4. 大丸山古墳
- 5. かんかん塚（茶塚）古墳
- 6. 勝山城址
- 7. 文珠古墳
- 8. 八乙女塚（表門神社）古墳
- 9. 馬乗山1号墳
- 10. 馬乗山2号墳
- 11. 口開遺跡・口開塚古墳、向山窯址
- 12. 川久保古墳

従来の円墳から、全長75ないし80mの前方後円墳と考える説が出されてきた。その後、山梨県教育委員会から刊行された遺跡地名表では馬乗山古墳、円墳として登録されている。

本墳を発掘調査したところ、後述のように組合せ式石棺を主体部とする古墳の墳形は円墳であり、その東側に接して別の前方後円墳の存在することが明らかとなった。

“八乙女塚”という名称は、昭和2年に本墳の眼下にある古墳（別名は表門神社古墳）に付けられており、発掘調査の結果と研究史とから、混同を避けるために組合せ式石棺を持つ古墳を馬乗山1号墳、東側の前方後円墳を馬乗山2号墳として、記述していく。

年	古墳名	墳形名	
昭和42			大久保栄一氏発見
〃 46	馬乗山（八乙女）古墳		山本寿々雄『甲斐考古』7の1
〃 49	馬乗山古墳	円墳	菊島美夫『甲斐考古』11の1
〃 50	八乙女1号墳	前方後円墳全長75m	小林広和他『信濃』27巻6号
〃 53	八乙女塚古墳	前方後円墳80m	上野晴朗『境川村誌』
〃 53	八乙女1号墳（馬乗山）	前方後円墳？	坂本美夫『甲斐考古』別冊2号
〃 54	馬乗山古墳	円墳	山梨県教育委員会『山梨県遺跡地名表』

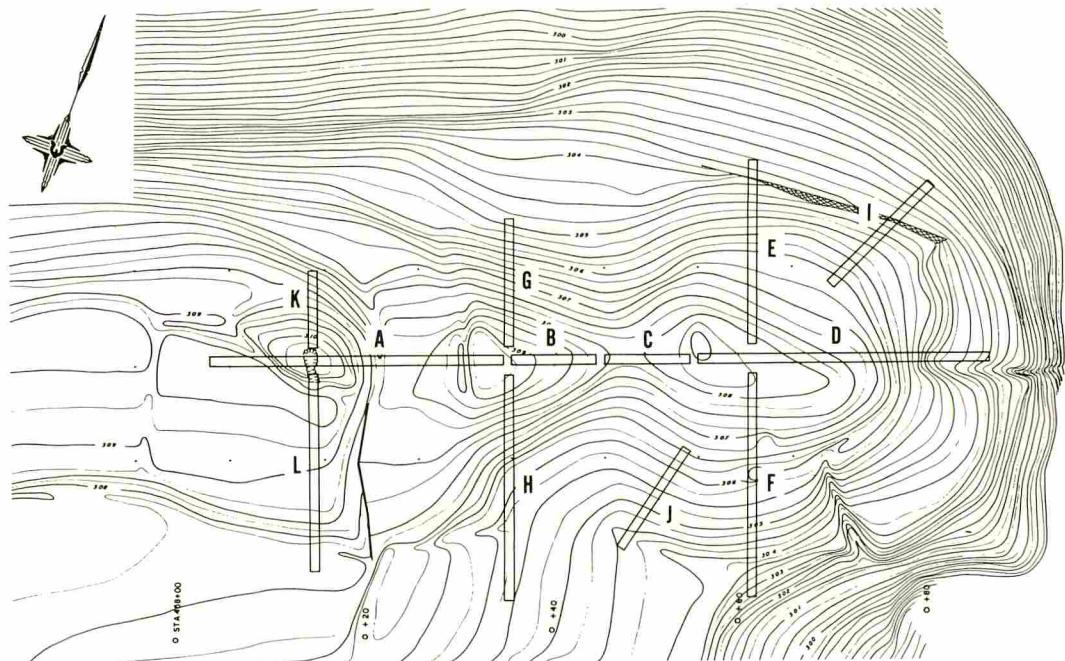
第1表 馬乗山古墳研究年表

第2節 遺跡の現況とトレンチ位置

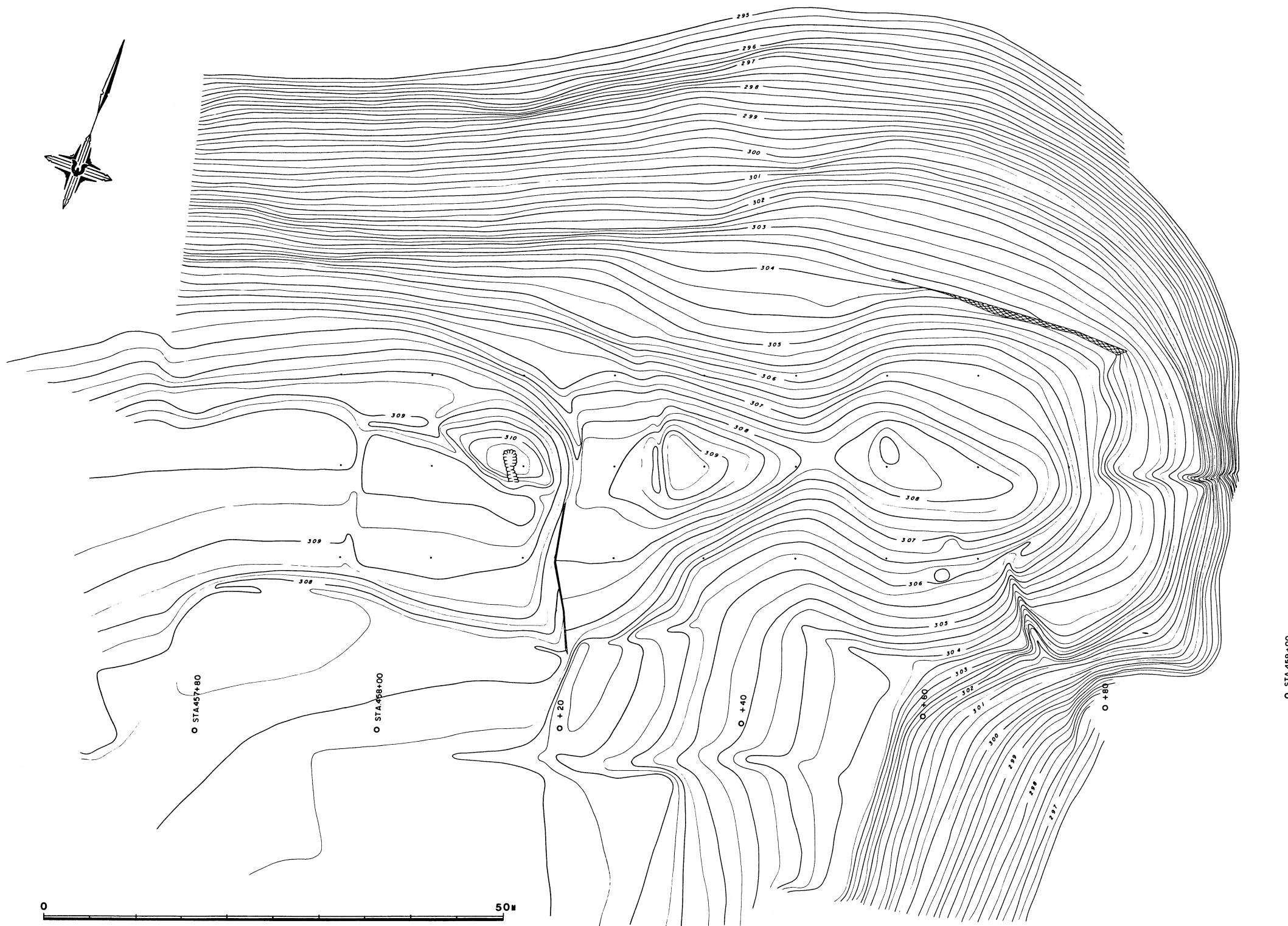
馬乗山1、2号墳は、ほぼ南から北に向って張り出した緩傾斜の舌状台地の縁辺部に占地する。この縁辺部は、その内側で緩やかに凹み、東西方向にベルト状の高まりを形成している。この部分に古墳が築造されている。

1号墳は、おおよそ墳頂の北半分が雑木で覆われ、その周囲は東側の一部を除き桑畠となっている。2号墳は墳丘およびその周辺ともに桑畠であったが、1号墳と接する前方部付近は笹竹や雑木に覆われた状況であった。

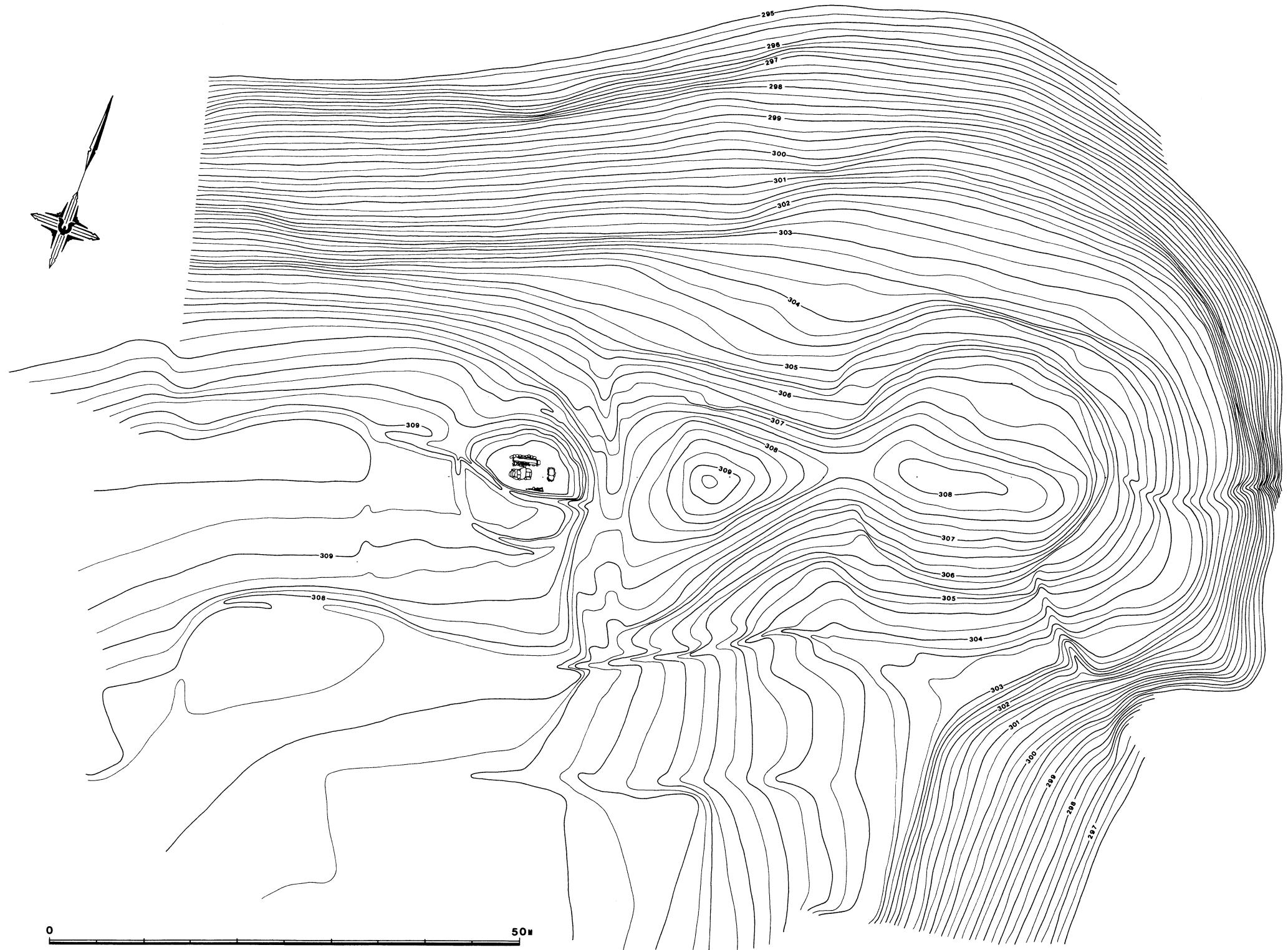
本墳は研究史で触れたように、大形の前方後円墳とする説があり、かつ縁辺部を遠望すると南西方向に並ぶ3個の高まりが確認でき、複数の古墳の存在が予想されたため、東西方向と、これと直交するように各高まりよりトレンチを設定した。



第2図 馬乗山1号・2号墳トレンチ設定図



第3図 馬乗山1号・2号墳現況平面図



第4図 馬乗山1号・2号墳全体図

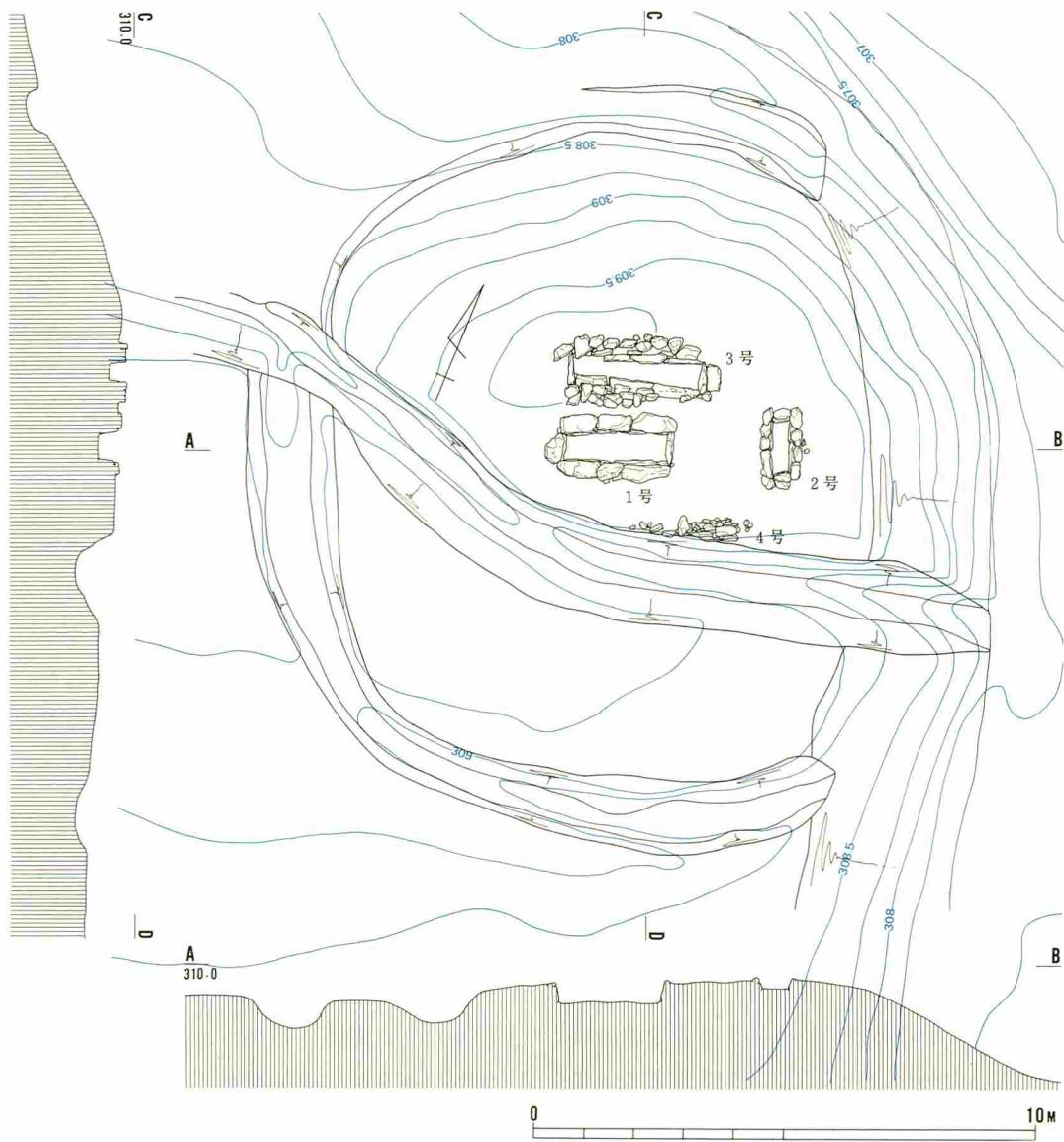
口開遺跡は台地下の低丘上に立地する。周囲はほとんど桑畠となっている。頂上付近は雑木に覆われ、南東部は墓地となっている。

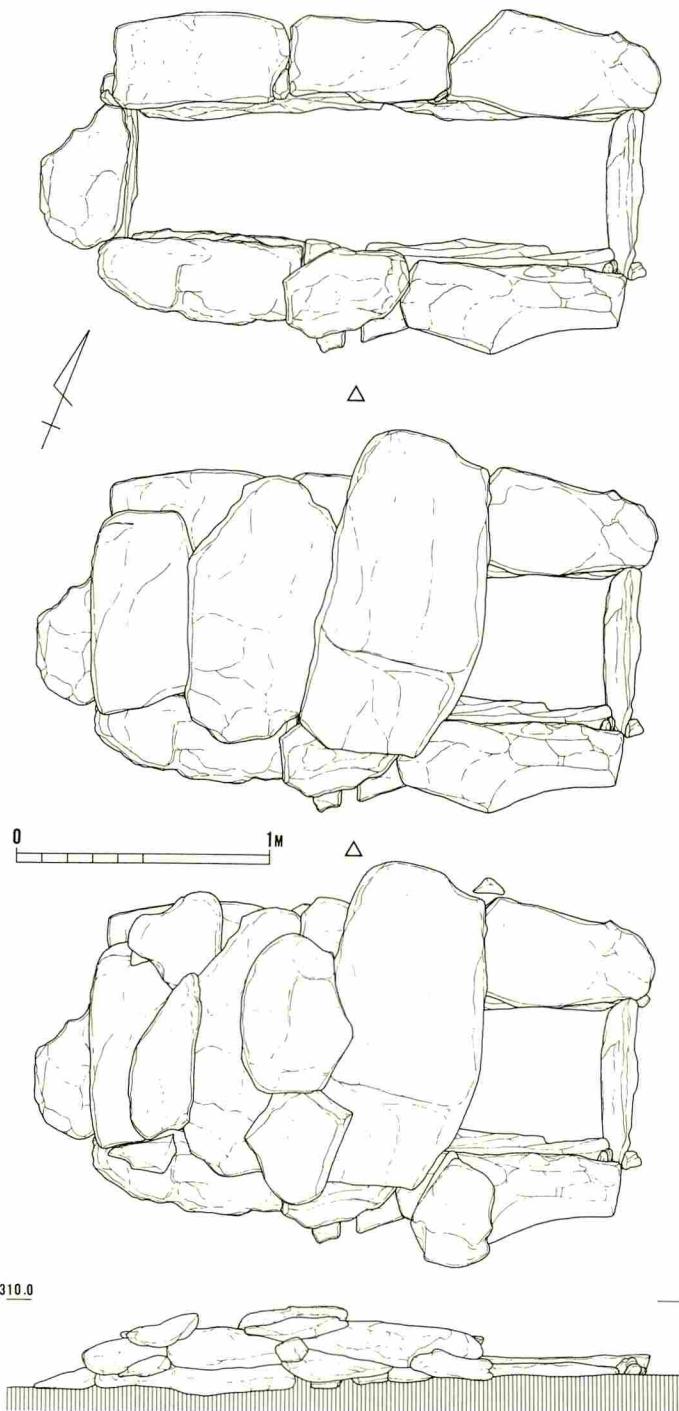
頂上付近には口開塚古墳の内部主体の石材が露呈し、さらに南側の裾には須恵器窯址の向山窯址が推定されている。このため斜面の等高線に添って、トレンチを設定した。

第3節 馬乗山1号墳

1. 墳丘・石室構造

墳形は、方形に近い円墳と考えられる。周溝内側上面で南北約13m、東西は東側の推定位置まで約12mであった。なお墳丘裾の標高は南側309.1m、北側308.25m、西側309.25m前後にある。また墳丘の高さは周溝内側上面から南側で0.8m、北側で1.6mであった。





第6図 1号棺平面図

4号棺は地山を掘り込み、また3号館は地山の上面あたりに構築されていた。

なお石材については、山梨大学教授・理学博士西宮克彦先生に鑑定依頼したところ、石英閃綠岩であることが判明した。

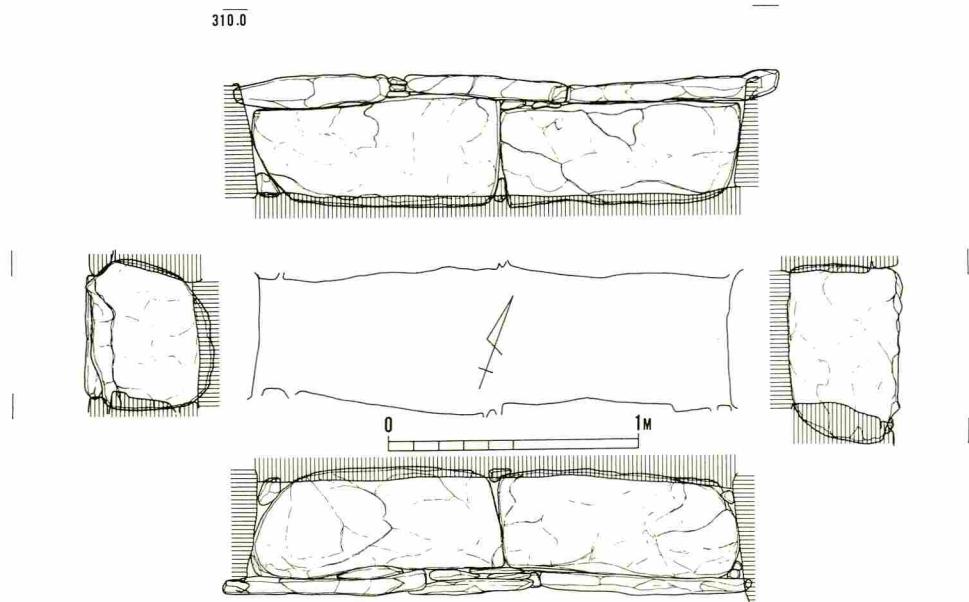
周溝は2号墳側と接する東側を除き、囲繞が確認できる。特に南から西側にかけて明確であった。周溝は幅1.5m前後でU字状を呈し、最も深いところで0.7m前後であった。なお周溝の位置は地形の制約を受けたのか、南側が北側に比べて95cmほど高い。

葺石、埴輪の施設は確認されなかった。

古墳の占地する東西方向に延びるベルト状の高まりの地山は、決して平坦でなく、西から東に向って相対的に低くなり、かつこの間に幾つかの高まりが見られる。1号墳は、この最も西寄りで、しかも高位の高まりを利用している。この高まりは、東側がやや急激に落込むようである。

墳丘は地山を整地し、その上に盛土を行なって構築され、3層ほどの版築が見られる。

埋葬主体は、合計4基の組合せ式石棺が確認された。配置は、ほぼ中央で東西方向に主軸を取る棺を1号棺、1号棺の中心線上にのり、主軸を南北に取る棺を2号棺、1号棺と主軸を同方向に取る北側の棺を3号棺、東側の棺を4号棺とした。このうち1、2、



第7図 1号棺展開図

第1号棺

昭和42年に発見された石棺であり、調査前から蓋石の一部が外され開口していた。

1号棺は墳丘のほぼ中央に位置した組合せ式石棺である。主軸を等高線に沿うように、ほぼ東西にとり、E- 20° -Nであった。

棺の規模は内法で、長さ1.86m、東部端幅0.50m、西部端幅0.43m、高さは床面から側壁上面まで東端0.43m、西端0.43mであった。

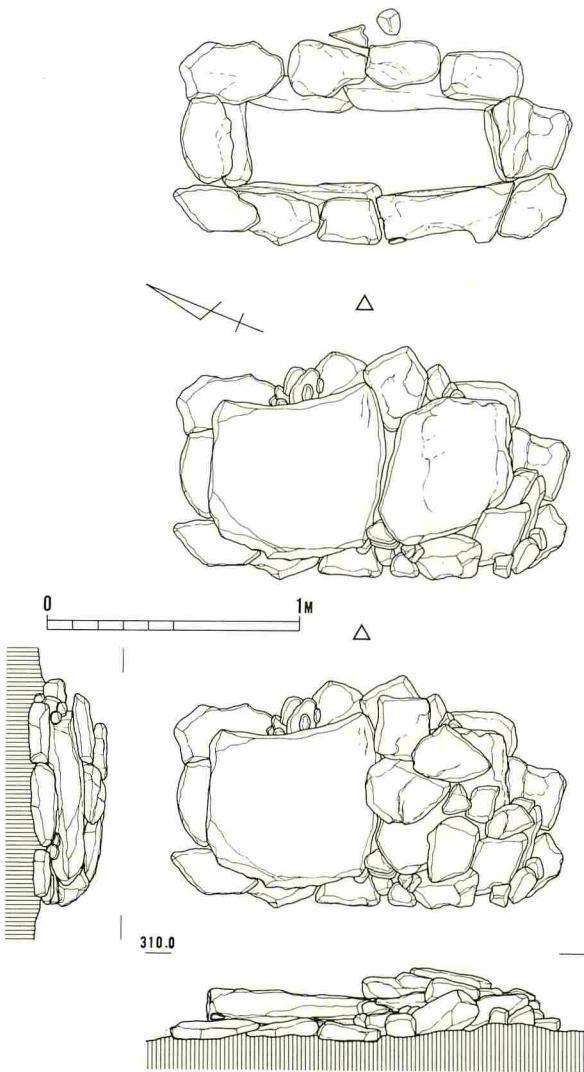
地山を45cmほど掘り込み、長さ3.74m、幅1.2mほどの墓壙を作り、その上面を床面として石英閃緑岩の板石状石材の広口面を用いて、間口石および側壁として上方で外側に僅かに開くように立て、その裏側に埋土を行なっている。

側壁は両壁ともに2枚の石材で構築され、空隙に小礫を入れて埋めている。側壁では上部に板石状石材の小口面を、下部の広口面に合せて縁石状に3個ずつ配し、両者の空隙に小礫を入れて間口石の高さに一致するようにしている。間口石側にも縁石状の石材を配するが、これは間口石の外側に置くものである。

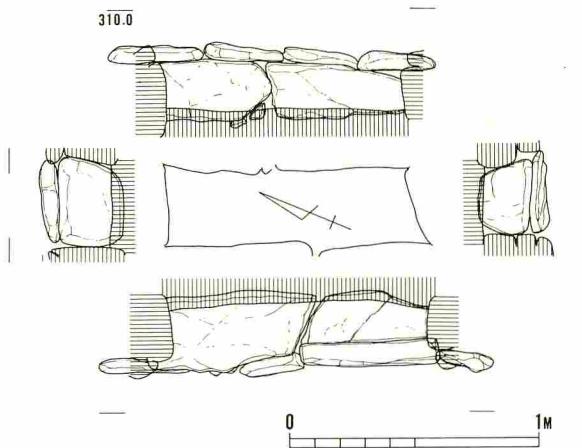
蓋石はこの上部に乗せられ、3枚が確認できている。開口している部分はおよそ1枚分ほどの広さであることから、当初は4枚で覆われていたものと考えられる。この蓋石の上にさらに小振りの石材を乗せ、かまぼこ状にして空隙を塞いでいるが、粘土による被覆状況は確認できなかった。

第2号棺

1号棺の東側約2mにあり、主軸を1号棺と直交する南北方向のN- 23° -Wにとる組合せ式



第8図 2号棺平面図



第9図 2号棺展開図

石棺である。

棺の規模は内法で、長さ0.95m、南部端幅0.3m、北部端0.45m、高さは床面から間口石上面まで、ほぼ0.23mの小形の棺であった。

地山を0.3mほど掘り込み、長さ1.87m、幅1.36mほどの墓壙を作り、その上面を平にして床面として、この上に石英閃緑岩の板石状の石材を上方で外側に僅かに開くように立て、間口石、側壁を構築している。

側壁は両壁ともに2枚の石材で構築され、空隙部には小礫を入れて埋めている。間口石、側壁ともその上部に小口面を利用した石材を縁石状に乗せ、上面の高さを一定に保っている。

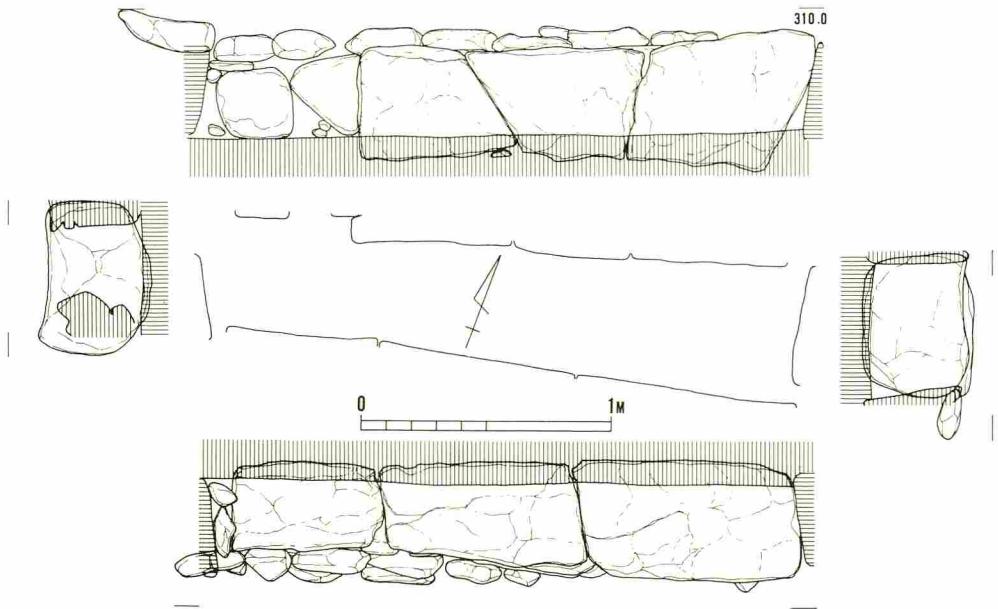
蓋石は2枚で構成され、そのうち南側の蓋石はその上に小振りの板石を重ね、間隙を埋めている状況であった。北側の蓋石上には小振りの板石は全く存在しなかったが、当初は南側同様に構築されていたものと考えられる。

蓋石の上部において、被覆粘土層は全く確認されなかった。

第3号棺

1号棺の北側に僅かに主軸角度を違えて沿うように配置された組合せ式石棺で、E-13°-Nであった。

棺の規模は内法で、長さ2.32m、東部端幅0.54m、西部端幅



第10図 3号棺展開図

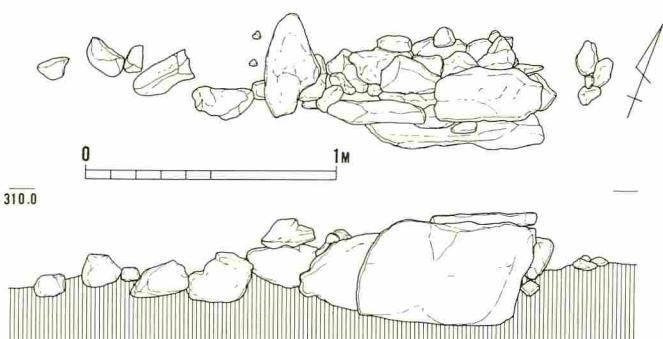
0.43m、高さは床面から間口石上面まで、東端0.37m、西端0.39mであった。

地山をほとんど掘りこまず、版築した封土を切り込んで構築されている。墓壇は長さ3.25m、幅1.3m、深さ0.4mほどで、地山を平坦にして床面として、石英閃緑岩の板石状の石材をほぼ垂直に立てて、間口石、側壁を構築している。

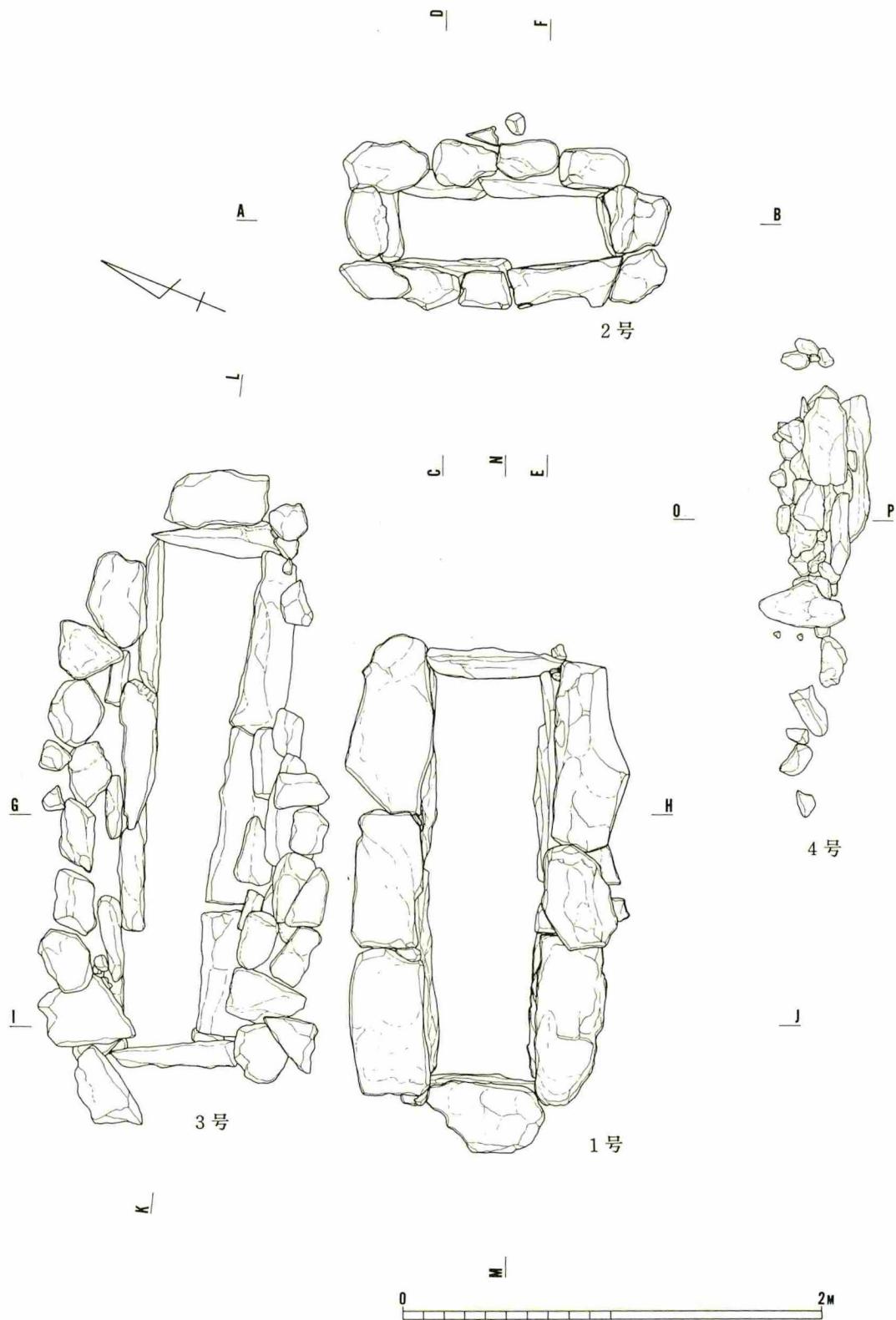
側壁のうち南側壁は3枚の板石で構成し、空隙を小礫で埋めている。一方、北側壁は東側を大形の石材3枚、西側をやや小振りな石材2枚、合計5枚で構築し、西側の小振りの石材は外側に約1枚分の厚さほど突出して作られており、側壁の線が乱れている。また両側壁ともに、東から西に向って石材が小振りになり、かつ基底面を一定に保っているため、上面が西に向って徐々に低くなっている。このため途中から上部に板石の石材の小口面を使って縁石状に配して、上面の高さを一定に保っている。しかし小口面とその下の側壁の面は一線に揃っていない。東壁の間口石の裏側にも縁石状の石材が据えられている。

蓋石は全く確認できなかつたが、これは後世に搬出されたものと考えられる。

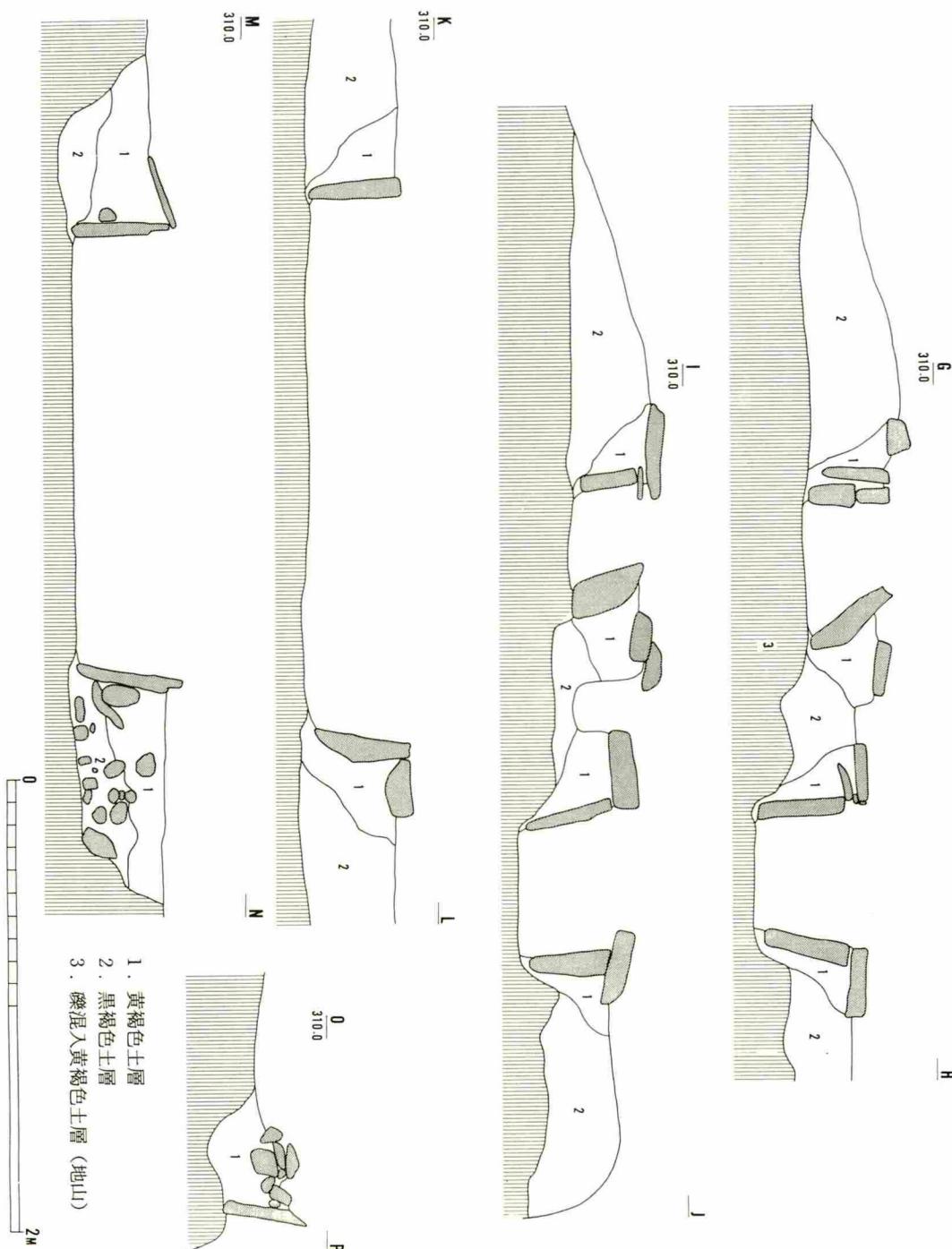
第4号棺



第11図 4号棺展開図



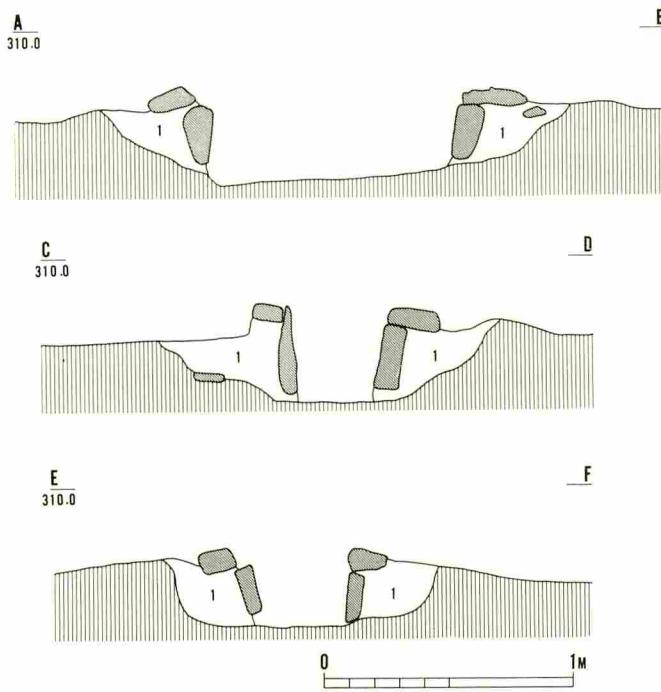
第12図 1号墳石棺配置図



第13図 1・3・4号棺セクション図

1号棺の南側に存在する組合せ式石棺の残存と考えられるものである。残存の石材から、主軸をほぼ東西に向けるものといえるが、北側壁の際まで、東西方向に走る根切溝によって破壊されている。

地山を掘り込んで石英閃綠岩の石材を立て、その裏側に埋土している。



第14図 2号棺セクション図

でのものを含めると5本発見されたことになる。

2号棺は蓋石の残存から副葬品の存在を期待したが、全くの期待はずれで何も出土しなかった。また3・4号棺についても何も発見されなかった。

3. 出土遺物

昭和42年に発見された遺物が、中道町白井の大久保栄一氏によって保管されている。大久保氏によると第15図の如くの配置で出土したとのことであった。組合せ式石棺の主軸に沿って東側に剣、直刀が置かれ、西側に鉄鎌が集中する傾向といえる。

出土遺物（第16図）は剣、直刀、鉄鎌のほかに刀子が発見されている。

剣は全長63.2cm、茎部長さ13.2cm、幅3.5cmの長剣である。茎に目釘孔

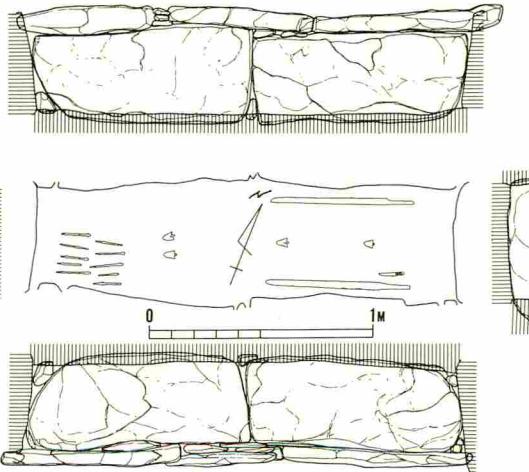
規模は不明であるが、それでも残存する石材からは、長さ2m前後、高さ0.35m前後の規模が推定される。

2. 遺物の出土状況

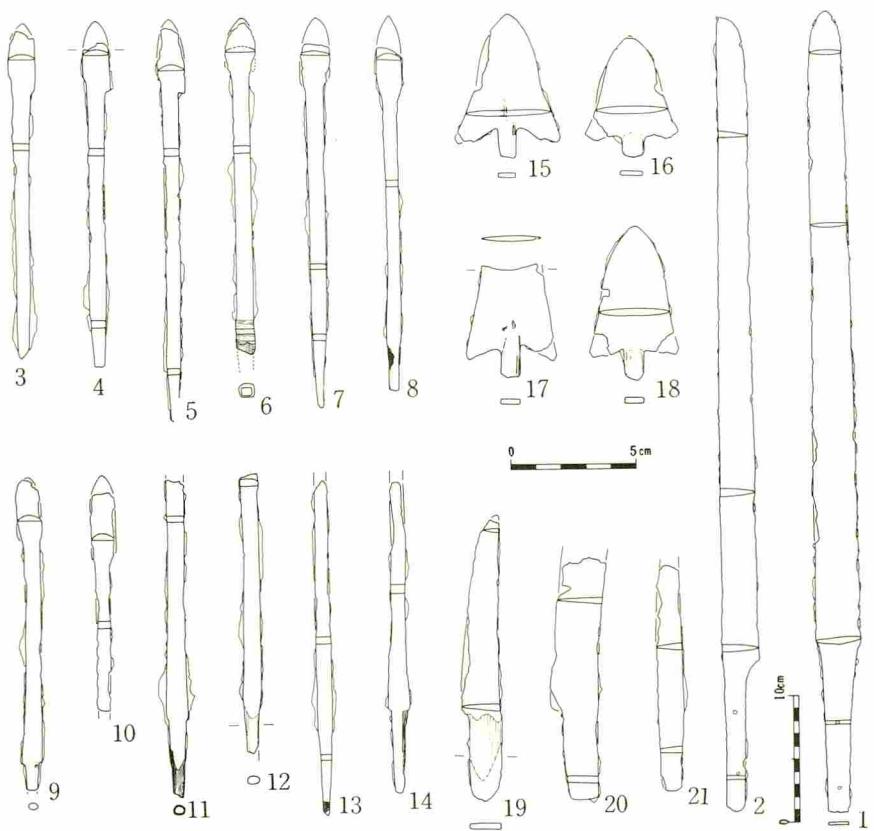
今回の調査において墳丘からは、全く遺物と考えられるものは発見されなかった。

組合せ式石棺が都合4基確認された。このうち1号棺の南西コーナー付近から鉄鎌が1点出土している。恐らく昭和42年に発見された時に回収されずに残ったものであろう。

腸抉をもつ無茎式の鉄鎌である。本形態の鉄鎌は、これま



第15図 1号棺遺物出土（昭和42年）状況概念図



が2個穿たれて
いる。剣の先は
ふくらの枯れた
ものである。

直刀は全長62.
7cm、茎部長さ
12.0cm、刃幅3.
0cm、棟厚み0.
65cmを測る。ふ
くら切先で、片
関撫角式の平棟
平造である。茎
部に目釘孔が2
個見られる。

刀子(19~21)
は3本ほど出土
している。9.5
~11cmほどの現
存長である。

第16図 出土遺物（昭和42年出土品）

鉄鎌には有茎

式（3～14）と無茎式（15～18）が見られる。有茎式は柳葉形である。無茎式は二等辺三角形を呈し、長さ6.1cm、刃幅3.6cm、厚み0.3cm、茎は1cm前後である。腸抉を持つ、又はさみ式の鉄鎌である。

4. 小結

鉄鎌のうち有茎式については、片刃形態のものは全く見られず、柳葉形態が占めている。両者の関係から相対的であるが、5世紀中葉頃が想定され、また無茎式も同様の時期が求められる。この年代に対して、直刀、剣もそれほど矛盾しないものと考えられ、1号棺の造られた時期と考えられる。

本墳には1号棺を含めて4基の石棺が認められたが、他の棺には副葬品は認められず、副葬品からの新旧は求められない。しかし、1号棺が中央にあることから、これが最初に作られ、以後2、3、4号棺が作られたものと考えられる。この中で2号棺は造りから1号棺と同時に作られた可能性がある。

第4節 馬乗山2号墳

1. 墳丘・石室構造

本墳は台地縁辺部の東西方向に延びるベルト状の高まりの上に構築され、前方部を西に置き、主軸を東西にとる前方後円墳である。

調査前の状況は、後円部の一部を除き、ほとんどが再原林化していた。前方部と1号墳の境いに幅の狭い溝ないし小径が南北に走り、前方部の正面斜面にも南北に走る小径が見られた。後円部側では南東斜面あたりに南北方向に走る小さい沢と、それに沿った小径が、また東斜面あたりにも下方に向う東西方向の小さい沢と、それに沿った小径が見られた。また前方部と後円部の南斜面側には、石垣や、東西に走る小さい沢が見られた。後円部の北東部は一部に凹地が認められた。

本墳の乗る礫混入黄褐色土の地山は、西から東に向って徐々に低くなり、東側で台地の傾斜面となるが、この傾斜面を後円部の斜面として利用している。地山の上層は黒褐色土層であったが、この上面にカーボン、焼土などが認められ、旧地表面と考えられる。この地表面を整地した上で、その上に封土を互層に版築していった。

版築の状況は、主軸方向ではほぼ水平に積んでいき、大きく3枚前後の版築が確認される。主軸に直交するトレーナーでは、前方部が水平に近い状況で封土が積まれているのに対し、後円部側では内側から外側へやや斜めの方向に封土を積み上げている。

斜面の傾斜方向に墳丘を構築したため、前方部と後円部との墳丘裾の高さが違っている。後円部東側はほぼ303.75m、南側は303.50m、北側は304m～303.25m、前方部正面墳端は307.75m、南西コーナー付近は306.75m、北西コーナー付近墳端は305.75mの標高であった。従って前方部と後円部の主軸上で約4mほど、前方部の南北が1mほどの高低差をもっている。後円部の南北はほぼ同一に近い状況である。

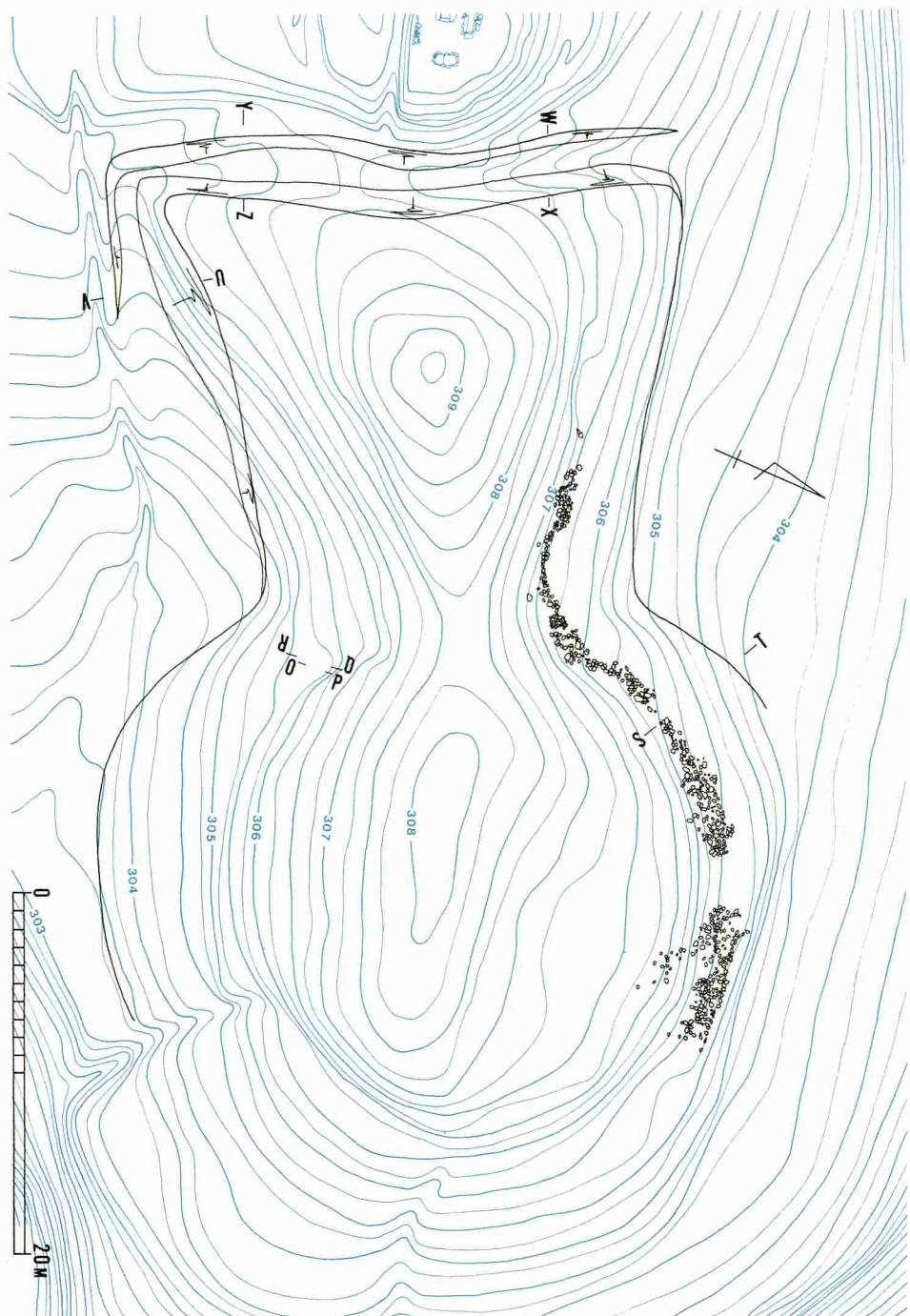
これらを考慮して規模を復元すると、全長約60m、前方部幅約30m、くびれ部幅約20.5m、後円部径約39.5mとなる。また前方部の高さは現状で標高309.31m、後円部は308.13mで1.18mほど前方部が高い。しかし後円部の308mラインは橢円形をしており、平坦面になる分を除いても、当時の墳頂は現状よりもさらに高い位置にあったものと考えられる。大久保氏の先代が畠の客土に使うため後円部から土を取ったということであり、後円部の凹みはそのためのものと考えられる。

本墳は2段築成で、かつ葺石、周溝をめぐらせていましたことが明らかになった。

2段築成は調査の結果後円部と前方部の一部で確認された。前方部の正面斜面ではその形跡が不鮮明であったが、後円部とくびれ部付近の北斜面で明確に確認できた。その平坦面で葺石のものであったと考えられる礫も合せて確認された。

築成は後円部東側で標高305.5m、南側で305.5m前後、北側は305.25m前後、北斜面のくびれ部から前方部にかけての付近で306.50m前後と、前方部に向い上昇していく。

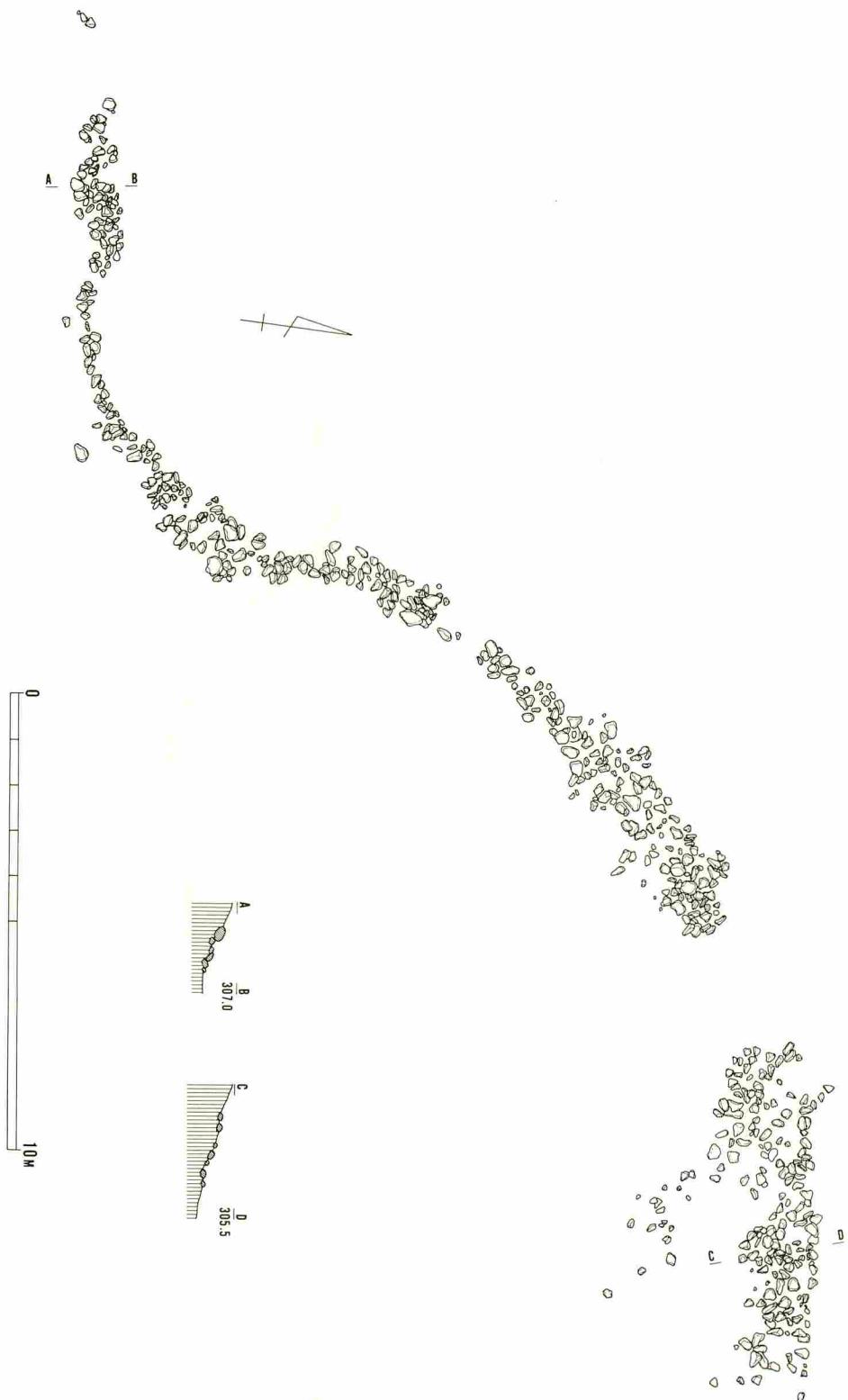
葺石と考えられる礫が墳丘の北斜面の後円部から前方部の一部にかけて確認された。築成面にやや傾斜をもって礫が乗っている状況であった。直径20cm前後の河原石であり、幅1～1.5m、長さ約33mに渡って見られる。その石の状況を見ると、やや乱雑であり、石が重なる状況が多く、整然と目地を合せたような状況ではない。これからすれば、2段目の裾付近いしそ



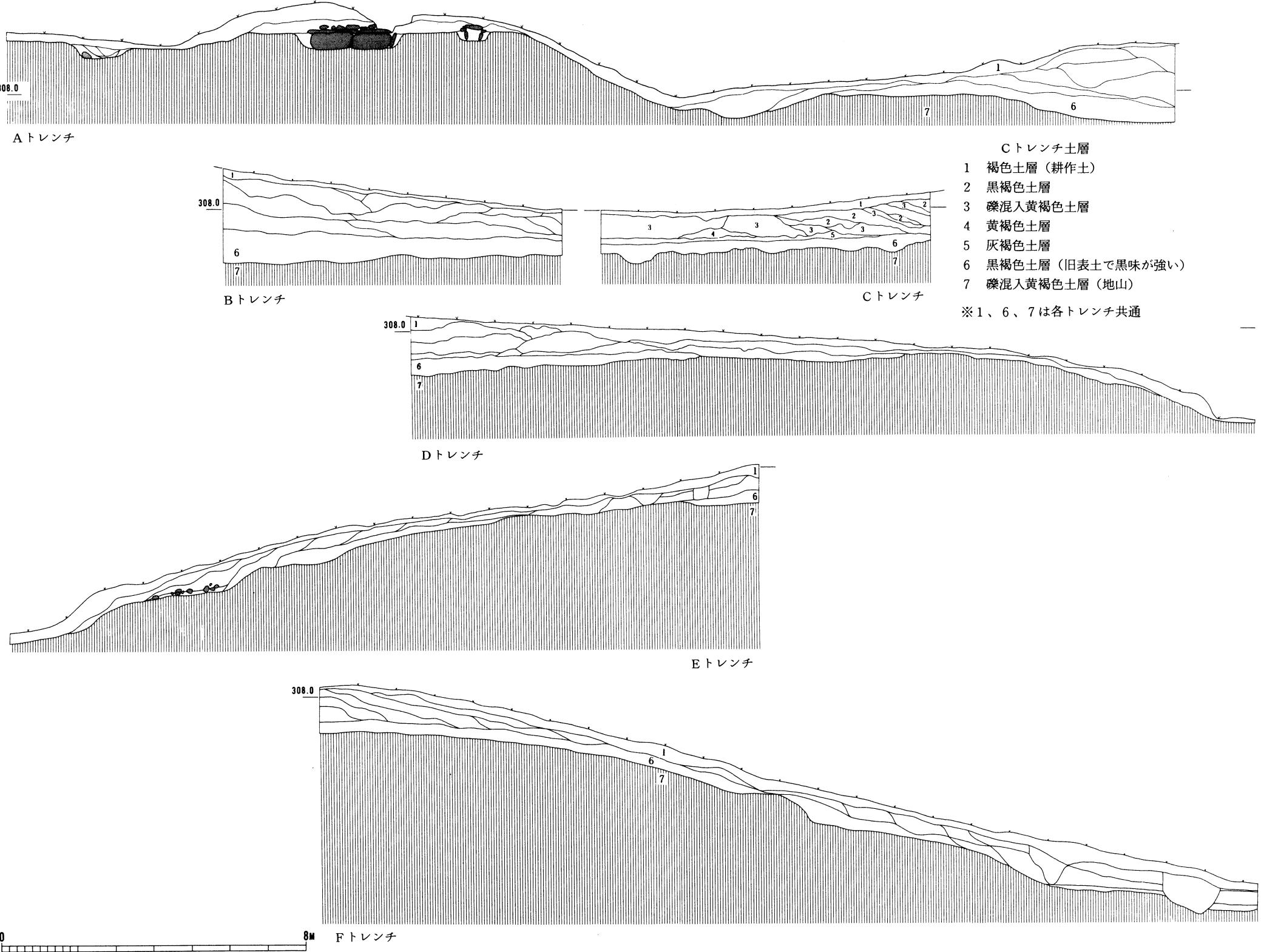
第17図 2号墳全体図

れ以上に葺かれていた礫が、落下して平坦な築成面に残ったものと考えるのが、最も適當といえよう。

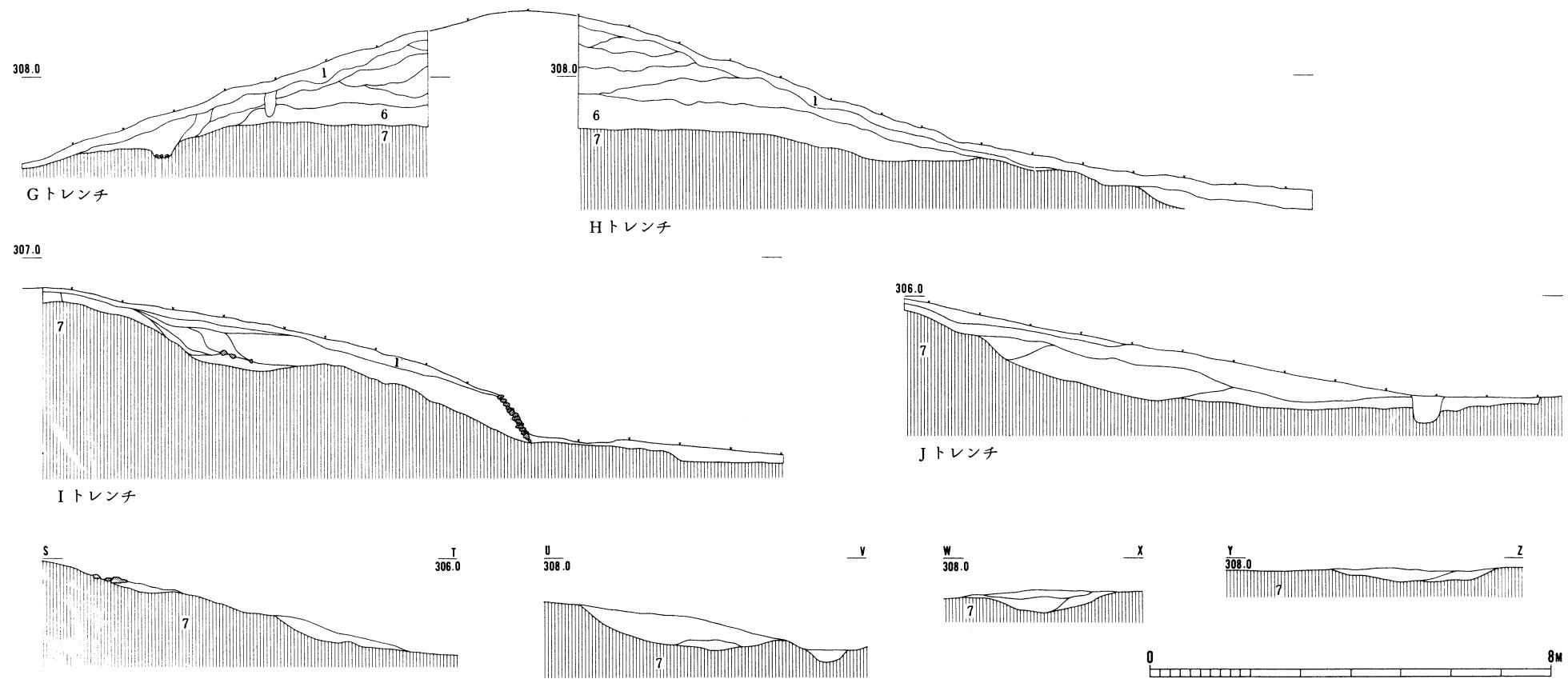
周溝は全面に見られるものでなく、特に前方部を中心に巡ぐっている。前方部の正面付近では中央あたりで内側にゆるやかに湾曲している。中央部やや北寄で上端幅3.3m、底部幅1.2



第18図 2号墳葺石状況図



第19図 1・2号墳セクション（東西）及び2号墳セクション（南北）図



第20図 2号墳セクション（南北）図

m、深さ0.4m、前方部南西コーナー付近で上端幅2.9m、底部幅0.6m、同北西コーナー付近で上端幅3.0m、底部幅2m、深さ0.5m前後を計測する。また底部の標高は中央で307.75m、南西コーナー付近で306.75m、北西コーナー付近で306mであり、中央を中心に南北両方向で低くなる。この周溝は前方部の北斜面側では、地形の傾斜との係りから、地形の中に自然に消えていく状況であり、わずかに墳端部が確認できたにすぎない。一方南側斜面では約2mほど周溝が正面からの続きとして確認できるが、それ以東についてはくびれ部付近まで墳丘裾の斜面が認められ、それ以東は墳端のみが確認される状況である。後円部側は傾斜面に立地したため、自然に周溝が消滅した状況である。

主体部

2号墳の主体部は、後円部にも前方部にも存在が確認されなかった。先述したが、地主の先代がかつて畑の客土として土取りをした際、後円部付近から剣、刀、勾玉、鏡等が出土したと伝えており、主体部が後円部に存在したことが想定できる。

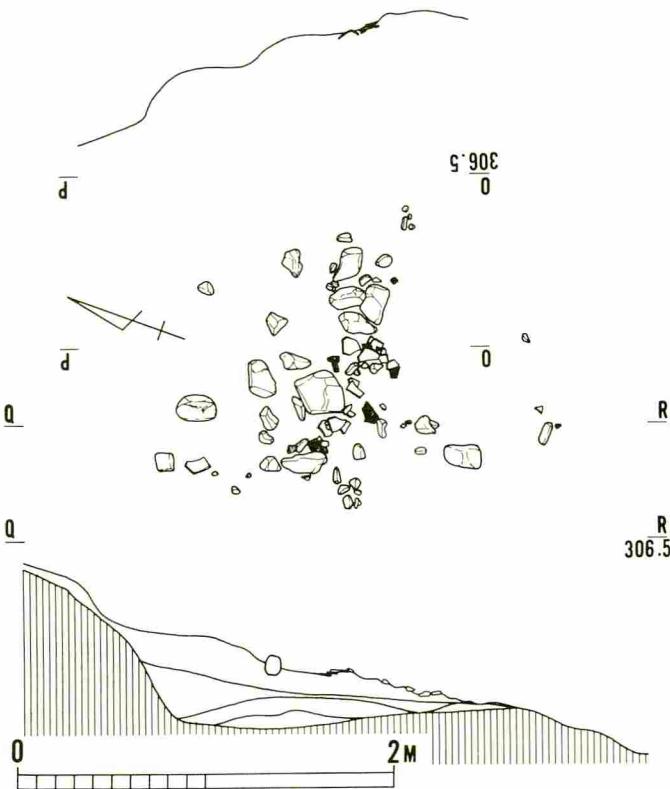
だが調査においては、全くその痕跡さえも確認できなかった。従って内部形式がどのようなものであったのか否か不明である。しかし後円部とその周囲を見ても1号墳のような板石状の石材は認められず、墳丘の削りとられた高さにもよろうが、竪穴式石室を考えるより、木棺直葬などの形態が推定される。

2. 遺物の出土状況

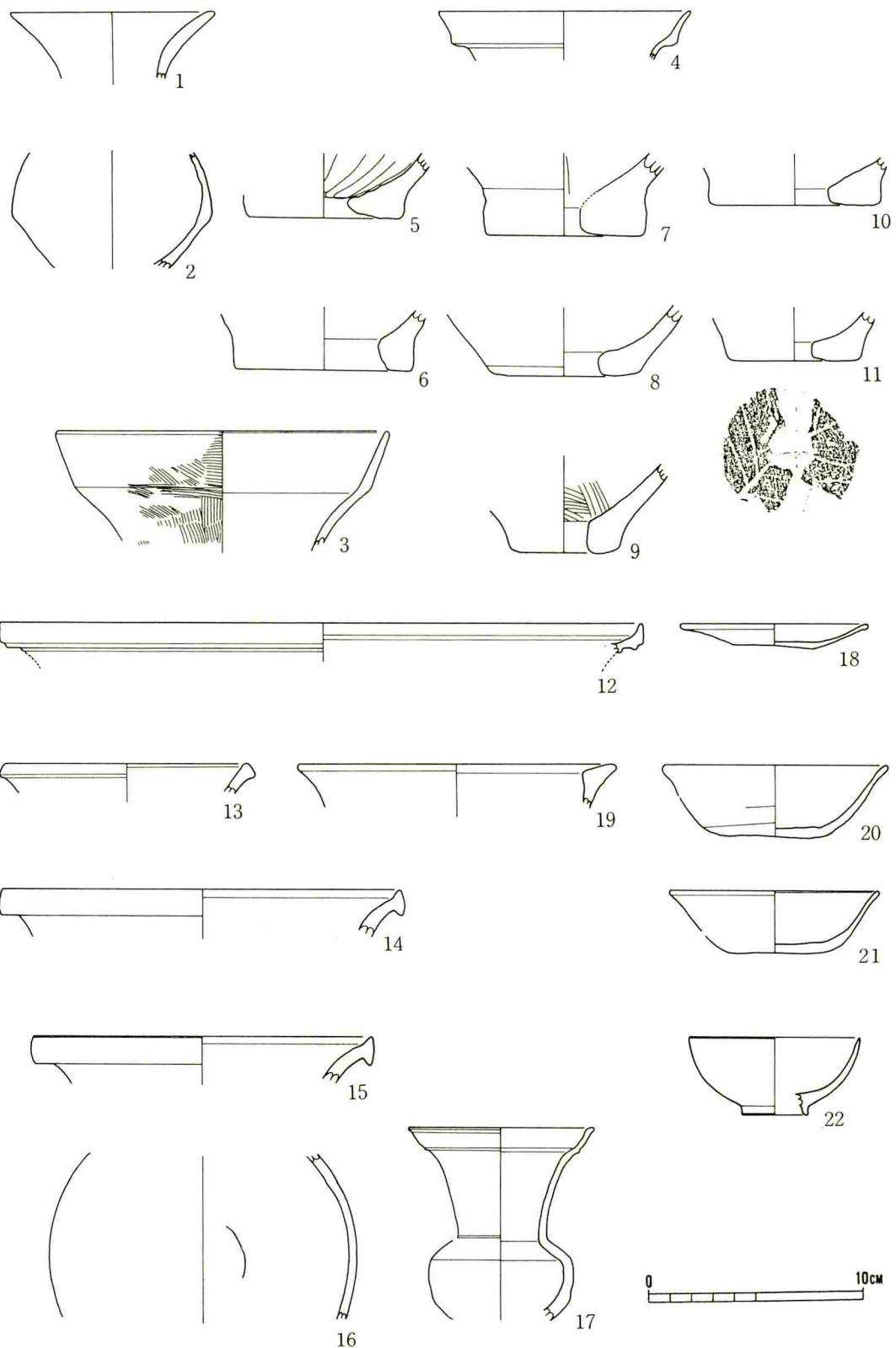
調査前の表面調査で、若干の須恵器片が採集された。

調査の結果後円部の南側くびれ部に近い位置の築成面付近で、礫に混入した須恵器片が比較的集中した状況で遺存しているのが確認された。甕、壺などであったが、いずれも平坦面より30cmほど浮いた状況であり、上部からの落下か平坦面の埋まった時期に置かれたことを意味している。

このほか墳丘、特に北側斜面の耕作土中などから土師器、陶磁器片などが出土した。ほとんどが細片であり、出土位置に規則がなく、



第21図 後円部遺物出土状況図



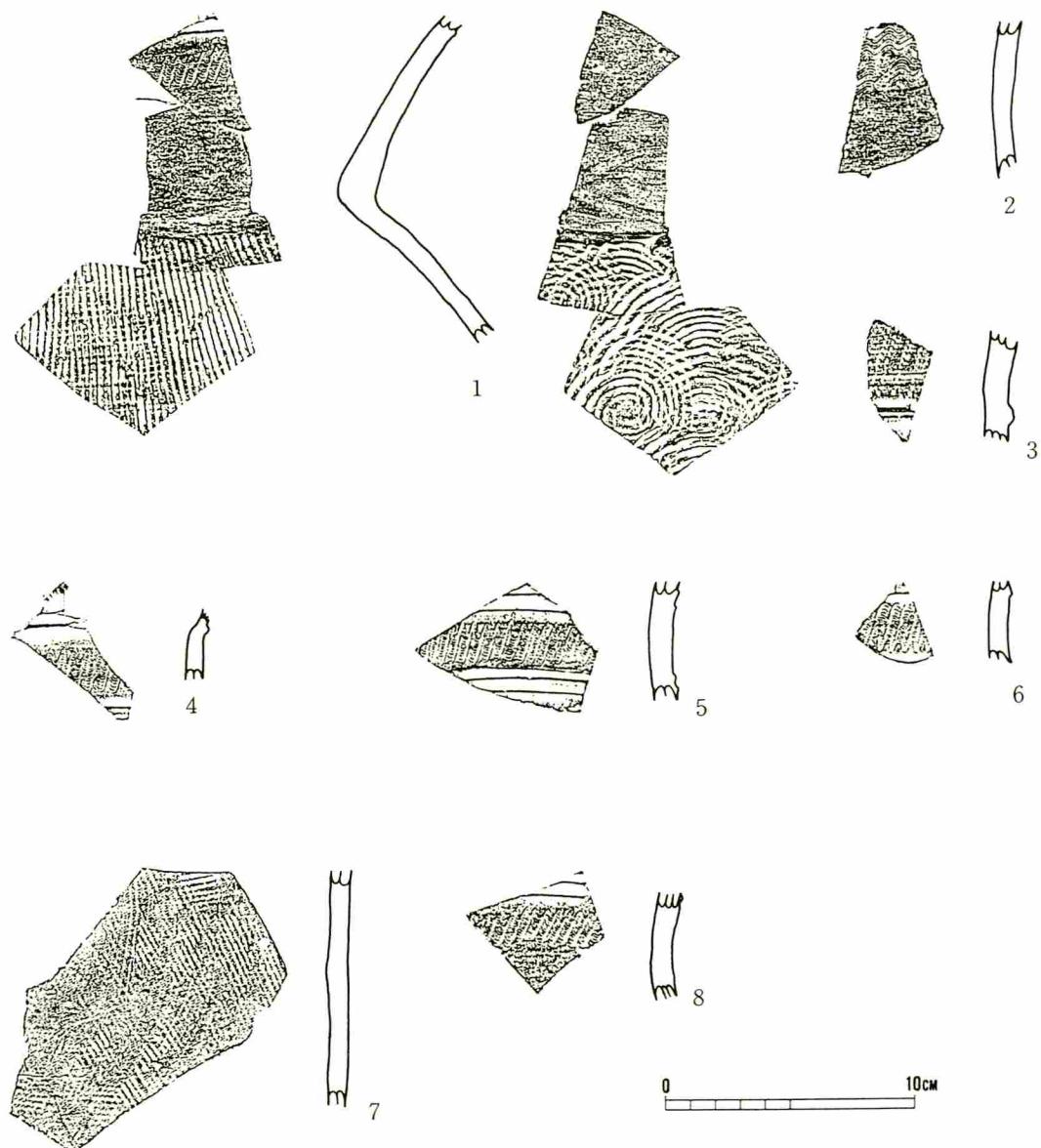
第22図 出土遺物(1)

かつ墳丘封土の中には、土師器片の混入が認められることから、墳丘封土に入っていたものが開墾などによって表に出てきた可能性も考えられる。

3. 出 土 遺 物

土師器には、単口縁の壺（第22図1）、有段口縁の壺（同3、4）、底部穿孔土器（同5～11）、甕（同19）、皿（同18）、坏（同20、21）が見られる。

単口縁の壺、底部穿孔土器、甕は、砂粒を含むやや粗い胎土である。これに比べ有段口縁の壺、皿、坏などは粒子の細かい精々土といえる。



第23図 出 土 遺 物 (2)

底部穿孔土器の孔は、そのほとんどが焼成前に穿たれたものである。甕は砂粒以外に雲母の混入が認められ、内面に横走するハケメがかすかに認められる。皿、坏には、赤色粒子が混入されている。底は糸切のようであるが明瞭ではない。

須恵器には甕（第22図12～15、第23図）、提瓶（第22図16）、聰（同17）などがある。甕の口縁部形態は3種類ほど見られるが、第22図12の例は下端に突起があり、やや違いがある。口縁部の整形にも幾つか見られ、同13～15は横走のハケメが認められる。このほか波状文、刺突文（第23図3）が見られる。波状文にも、やや間隔の広い例（第23図2）が見られる。このうちの波状文の細かい例が、甕12に組合したものと考えられる。

聰は口頸部の太い造りを特徴とするものである。文様などは見られない。

須恵器の胎土の色調は、提瓶と、第23図3がやや白灰色以外は、灰色ないセピア色である。

陶磁器片は碗（第22図22）が認められる。明るいコバルト色の吳須で松、雀などが描かれ、型紙摺りの手法によって施文されている。

4. 小 結

陶磁器片は、型紙摺りの手法から明治～大正年間に、また土師器のうち甕、皿、坏類は平安時代末頃に位置付けられるものであり、本墳とは直接関係はないものといえる。

単口縁壺は、中道町岩清水遺跡に類例が見られる。同遺跡では口唇部に刻目をもつ甕が一緒に出土している。有段口縁の壺（第22図3）は、葦崎市久保屋敷遺跡第一号住居址に類例が見られる。岩清水遺跡同様に口唇部に刻目をもつ甕、および肩部に横走するハケメをもつS字口縁台付甕などが一緒に出土している。これら2遺跡はやや流動的であるが弥生時代終末から、古墳時代の初頭頃に位置付けがなされている。従って本墳出土品もこのあたりに位置付けが可能であり、一緒に出土した底部穿孔土器なども、ほぼ同一時期に置かれるものといえよう。しかし本墳と直接の関係はないものと考えられる。

須恵器は破片であるが、本墳と最も関係ある出土品と考えられる。これらを陶邑編年にあてはめてみると、甕、聰がⅡ型式第1～2段階、第23図3の刺突文様をもつ例がⅡ型式第4段階におかれる。前者は6世紀第1四半世紀後半～6世紀第2四半世紀前半、後者が6世紀第3四半世紀頃の時期が考えられる。

墳丘は後円部径が約39.5mなのにに対して、前方部幅が約30mと、前方部が極端に発達していないことが窺える。一方、後円部と前方部との比高は、現状では後円部が低く前方部が高いことになる。後円部の土取りを考慮しても極端に越すことはないと考えられ、この面では前方部の発達が認められる。しかし傾斜面に構築されており、幾分の考慮が必要かとも考えられる。平面形態からのみ位置を考えると、5世紀後半代に築造の下限が置かれるものと考えられる。須恵器は、その後の祭祀などに関係するものと推定される。（坂本）

第5節 特殊遺物の調査研究

境川村八乙女・馬乗山1号墳石棺の石材

山梨大学教授

理学博士 西宮克彦

1. 石棺石材の材質

馬乗山1号墳組合せ式石棺石材の材質名は、「石英閃緑岩」である。

2. 石英閃緑岩の特徴

石棺に利用されている中粒の石英閃緑岩の外観は優白色の石地に角閃石や緑泥石が散在するが捕獲岩片は見当らない。

顕微鏡で観察すると、主成分鉱物は暗褐色黒雲母・緑色角閃石・斜長石・石英・普通輝石・正長石等であり、副成分鉱物としては磁鉄鉱・チタナイト・燐灰石であり、二次鉱物としては比較的多くの緑泥石と極少の方解石がみられる。

緑泥石は、黒雲母・角閃石を交代し、斜長石には累帯構造がみられ、ときには斜長石中に絹雲母が生じている。

また、輝石は他形で、角閃石と黒雲母に取り巻かれて産するが多く、角閃石は黒雲母と共に産し、磁鉄鉱・チタナイト・ジルコンを有している。

3. 石材产地の推定

曾根丘陵南端およびその背後の御坂山地のうち、境川村の藤垈一大窪一鶯宿峠を結ぶ線上（境川が流れる）より東方に、石英閃緑岩が広く分布する。

これら露出する石英閃緑岩は、一般に灰白色であり、造岩鉱物の粒度の大きさにより、細粒（1ミリメートル以下の結晶粒）・中粒（1～3ミリメートル程度）・粗粒（3ミリメートル以上）に分類できるが、その鉱物組成はほぼ同様である。

このうち、粗粒のものには捕獲岩片を含有しているものや、風化してマサ土化が進んでいることがある。

これに対し、大黒坂と春日山とのほぼ中間地点、および大窪と鶯宿峠とのほぼ中間地点に露出する石英閃緑岩は、造岩鉱物粒が中粒から細粒であることが多く、捕獲岩片はほとんど見当らず、風化も左程進んでいない。

すなわち、後者に分布する中粒の石英閃緑岩は、石棺に利用されている石材の石英閃緑岩によく類似しているといえる。

しかし、馬乗山が曾根丘陵のほぼ北端にあり、大窪と鶯宿峠とのほぼ中間地点とは位置的にみてかなり遠隔地にあるといえる。したがって大窪と鶯宿峠とのほぼ中間地点の石英閃緑岩を探取したものとはいい難い。

となれば、境川や狐川の上流部では下刻作用が著しいので、各粒種の石英閃緑岩が浸食を受け、大小さまざまの岩屑となって、下大窪や小黒坂さらには三樋付近の境川とその周辺に堆積

していたであろうが、このうちの主として優白質で美しい中粒の石英閃綠岩を石棺石材として利用されたものと考えたい。しかし、これについてはかなり大胆な推論を加えたことを付記しておきたい。

第6節 口開遺跡

1. 遺跡概要

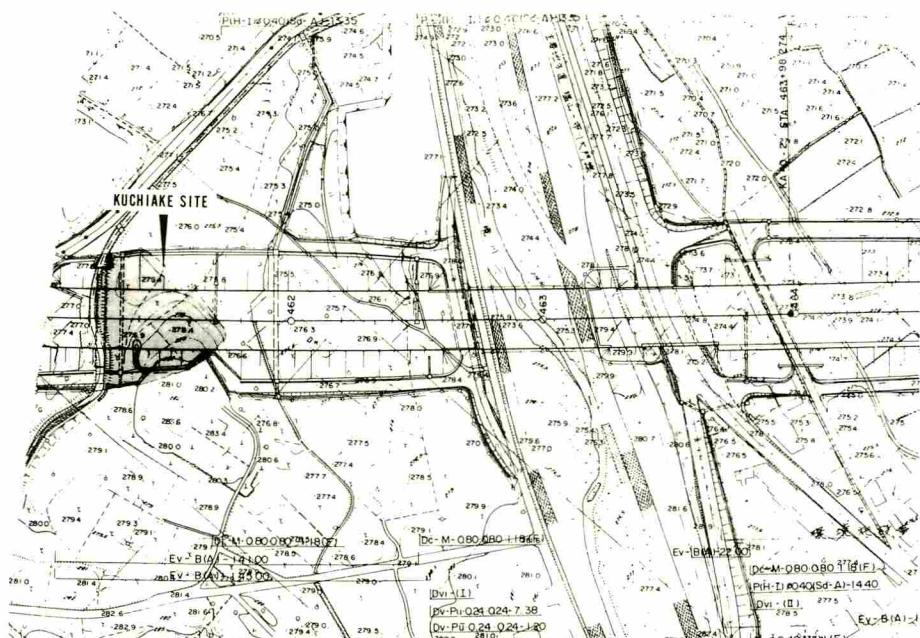
口開遺跡は境川村三櫛に所在し、坊ヶ峯丘陵の北西の断層下に位置している。遺跡の南側には口開塚古墳が隣接し、当初はこの古墳の一部と須恵器窯址が調査対象となっていた。

遺跡は境川によって形成された沖積地上にあり、地形は北へ向って緩く傾斜している。現状はすべて桑畠であり、厚さ30~40cmの耕作土（表土）を除去すると遺構確認面の黄褐色の砂質土層があらわれる。調査対象面積は1300m²ほどである。

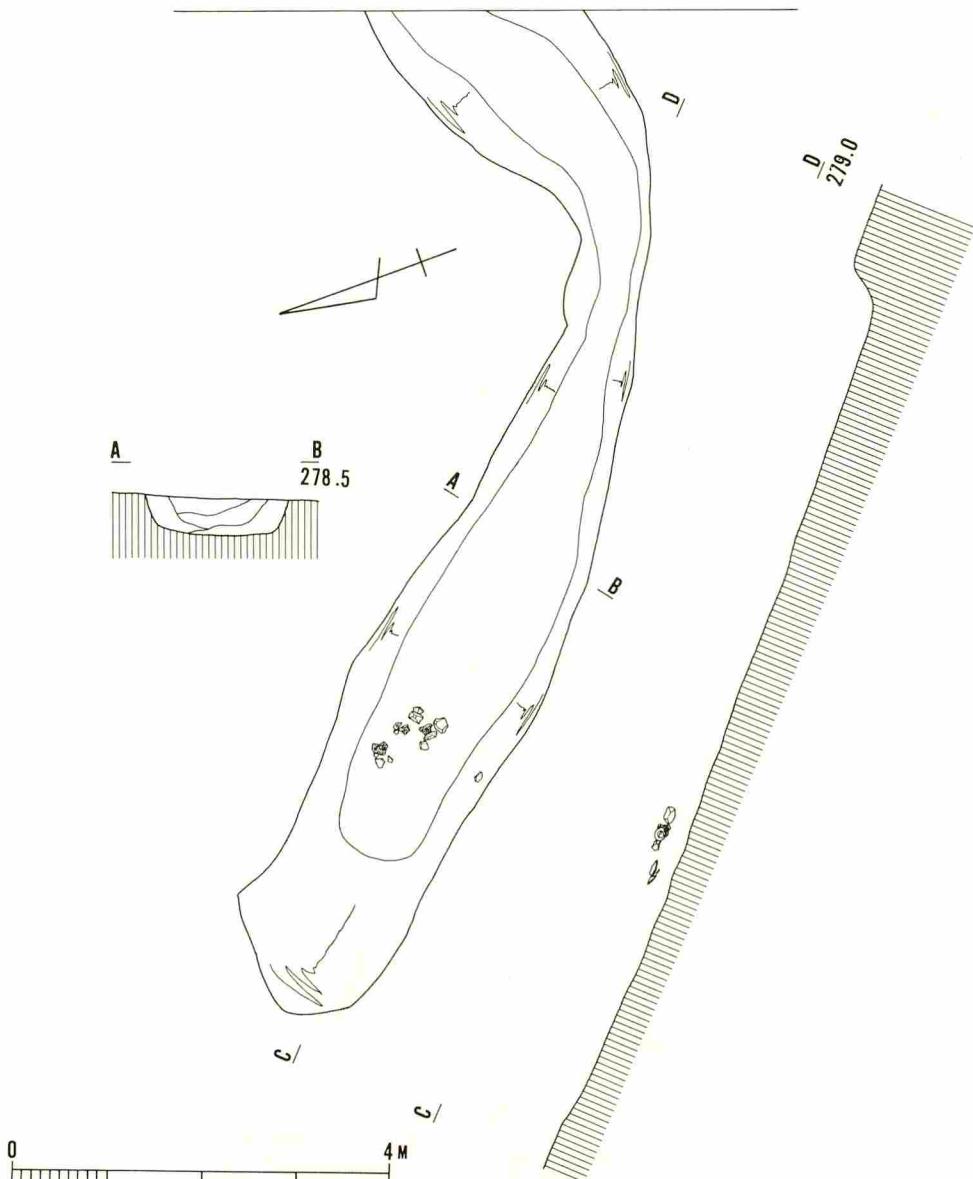
以前より、口開塚古墳の周辺からは、焼成に失敗したと思われる須恵器片が出土しており、古墳築造以後に、その墳丘の傾斜を利用した須恵器窯跡の存在の可能性が指摘されていた。それ故、今回の調査も、そのような須恵器窯に関連するような遺構、遺物の検出が期待されていたわけである。

2. 遺構

今回の調査では期待されていた須恵器の窯跡と古墳に関連する遺構は全く発見されなかった。発見された遺構は、溝状の遺構が1本のみであった。その出土遺物およびその形状から考えて、弥生時代後期の方形周溝墓である可能性が高い。規模は1辺が12~13mほどのものと思われるが、地形が北に向って傾斜しているためか、北辺と東辺が既に失われているようである。残っている部分で最も幅の広い部分は120cm、最も深い部分は遺構確認面から60cmをはかる。



第24図 口開遺跡位置図

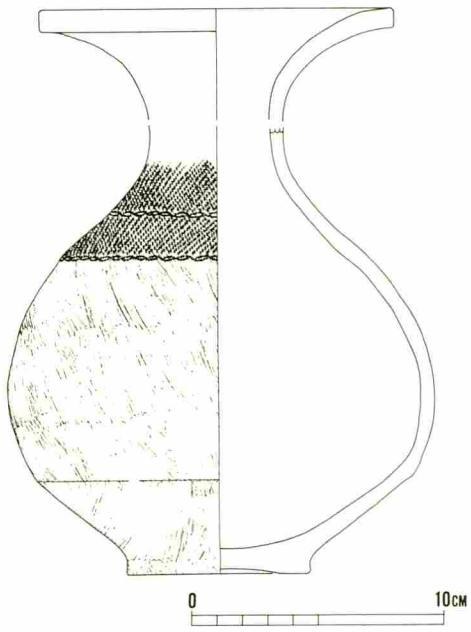


第25図 周溝状遺構平面図

なお、『境川村誌』によれば、口開塚古墳には周溝が存在する可能性が指摘されている。すなわち「塚の周囲には周溝の跡らしき区画が認められ、とくに後円部のまわりには明瞭に看取できるようである。」（上野、1978）という。ここでいう「後円部のまわり」とは、まさに今回の調査範囲の一部にあたるわけであるが、周溝と思われる遺構は何一つ確認できなかつたし、その痕跡さえも全く認められなかつた。また口開塚古墳の墳端を把握できるような新知見も得ることができなかつた。

3. 出 土 遺 物

方形周溝墓と思われる溝状遺構から、弥生時代後期後半の壺形土器が1点出土した。



第26図 出土遺物

全体的に赤褐色を呈し、胎土には多量の小石や砂を含む。焼成はあまり良くなく、表面は風化が著しい。口縁部は状態が悪く図化できなかった。口径は約14cm、高さ約22cm、胴部最大径17cm、底部7.2cmをはかる。

器全体に幅広い単位の刷毛状施文具で調整を施している。頸から肩の部分にかけて、その刷毛調整の上にL Rの結節縄文を施しているが、節は極めて細かいものを使用している。内面の調整は明瞭ではない。体部下半の部分に、わずかに1本の稜が存在している。（米田）

第3章 おわりに

馬乗山1号、2号墳は、副葬品等が極めて少なく、築造時期等について大まかなものとなつた。1号墳は5世紀中頃、2号墳は5世紀後半

から6世紀第2四半世紀前後頃まで追葬ないし、祭祀が行なわれたようである。従って1号墳が2号墳に僅かに先行する時期となる。このことは2号墳の前方部正面が、内側に湾曲していることと関係するものと考えられる。すなわち、周溝幅などからすれば、2号墳が1号墳に規制され作られたものと考えられ、両墳の年代関係とも合致することになる。

この地域には、台地の下に八乙女塚古墳（表門神社古墳）があり、おおよそ6世紀初めごろの築造にかかる古墳と考えられている。そうすると、この地域の古墳は馬乗山1号墳→2号墳→八乙女塚古墳（表門神社古墳）という発展過程が捉えられ、5世紀後半以降に特に勢力を伸張した状況が窺える。この時期は西方約3kmにある本県最大の古墳である銚子塚古墳を擁する地域の古墳が、急激にその規模を縮小する時期にあたる。畿内勢力の政策とも係りをもとうが、この時期に県内における首長層構造に変化を生じたと考えることができよう。すなわち、これ以後に銚子塚古墳のような飛び抜けた古墳の築造が見られなくなり、平均化した規模になってくる。そこに銚子塚古墳を擁した地域の地位の低下と、新興勢力の勃興とを読みとることもできよう。

口開遺跡では、L字状の溝が確認され、中より弥生時代後期後半に位置付けられる土器が出土した。遺構の形状からすれば、方形周溝墓の可能性が高いものといえる。馬乗山2号墳から出土した底部穿孔土器も、恐らく方形周溝墓などに関係したものと考えられ、弥生時代終末から古墳時代初めの時期が推定されている。従って古墳成立以前にもこの地域に、1つの勢力のあったことが考えられ、やがて首長層を形成する集団へと成長したことを考えることができるかもしれない。

以上のように今回の調査において、やや明確にならなかつた点もあるが、5世紀代の古墳の

状況と、その背後の一端を推定することができた。

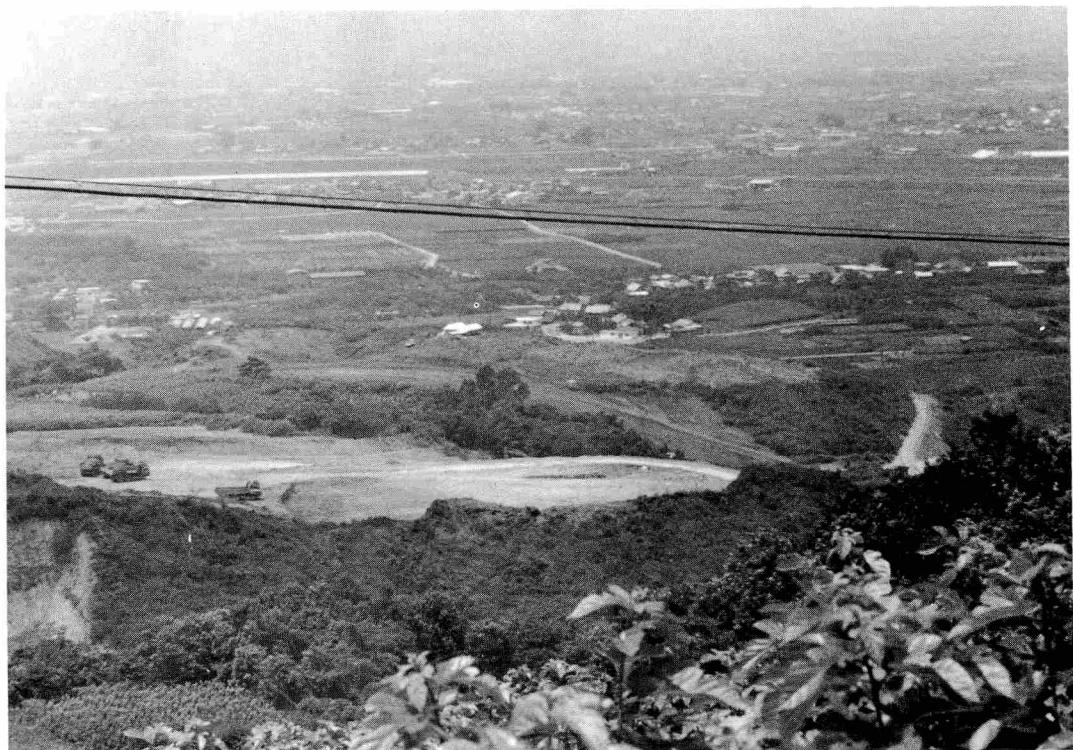
最後に調査にあたり協力をいただいた関係機関、多くの方々にお礼申し上げたい。

(坂本・米田)

参考文献

- 山本寿々雄 1970 「山梨県下埋蔵文化財発掘調査等を含む最近の傾向—70年代にむけて」
『甲斐考古』7の1
- 菊島美夫 1974 「甲斐国古墳出土の剣および直刀の消長」『甲斐考古』11の2
- 小林広和 里村晃一 1975 「山梨県境川村八乙女古墳群の現状」『信濃』第27卷第6号
- 上野晴朗 1978 『境川村誌』
- 坂本美夫 1978 「曾根丘陵における前期古墳の展開」『甲斐考古』別冊2号
- 山梨県教育委員会 1979 『山梨県遺跡地名表』
- 小松真一 1928 「甲斐国東八代郡下曾根村丸山塚古墳」『史蹟名勝天然紀念物調査報告』第3号
- 樋原考古学研究所 綱干善教他 1981 『新沢千塚古墳群』
- 中村 浩 1981 『和泉陶邑窯の研究』
- 萩原三雄ほか 1983 『京原遺跡』山梨県教育委員会
〃 『辻遺跡と薊在家遺跡』山梨県教育委員会
- 森 和敏 1984 『石橋条里制遺構・藏福遺跡・保ノ下遺跡』山梨県教育委員会
- 米田明訓・保坂康夫 1984 『久保屋敷遺跡発掘調査報告書』山梨県教育委員会
- 森 和敏 1979 『岩清水遺跡試掘調査報告書』山梨県教育委員会
- 橋本博文 1979 「甲斐における須恵器生産」『丘陵』6号

図 版



(1) 馬乗山 1号、2号墳遠景（南方より）



(2) 同上

図版 2



(1) 1号墳第1号棺開口状況（南方より）



(2) 同上、第1・2・4号棺（南方より）



(1) 1号墳全景（南方より）



(2) 同上、第1～4号棺配置状況（西方より）

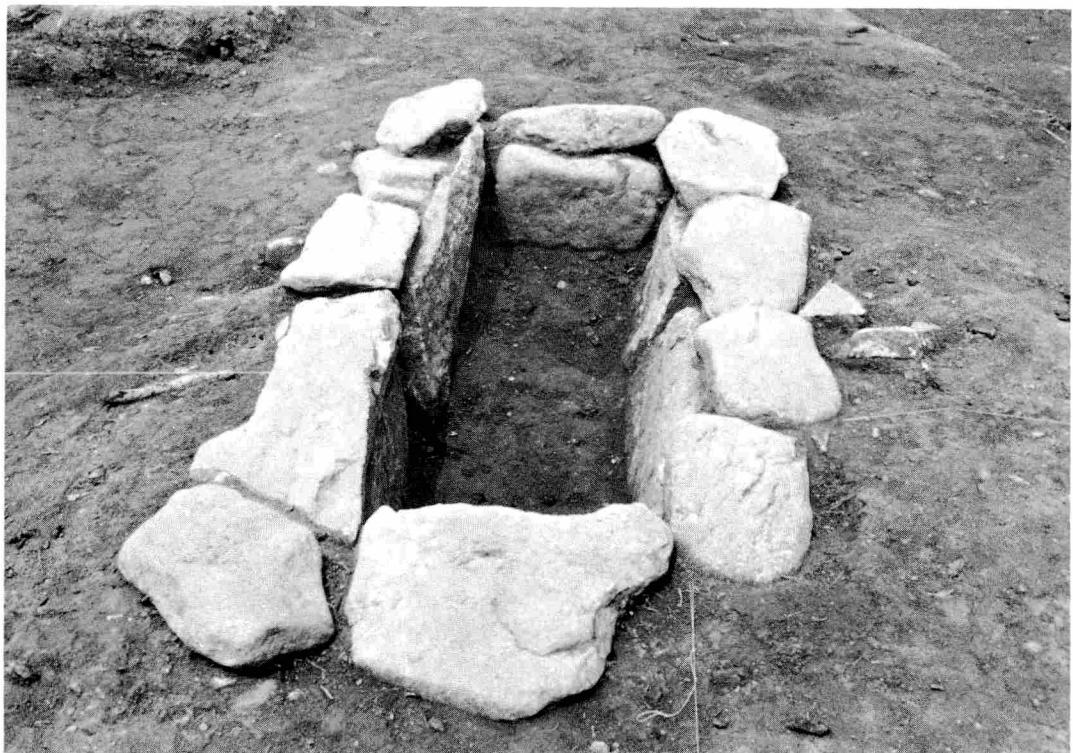
図版 4



(1) 1号墳 第2号棺



(2) 同上



(1) 1号墳第2号棺 蓋石撤去後（南方より）

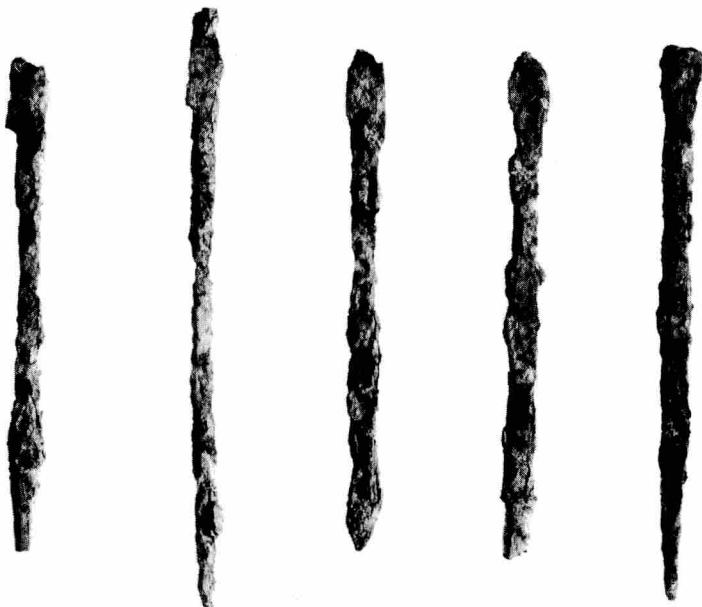


(2) 同第3号棺（南方より）

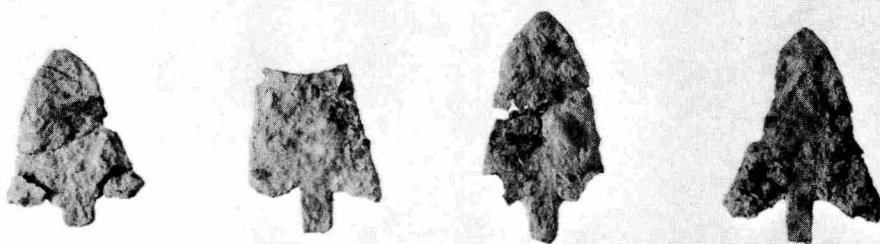
図版 6



(1) 1号墳第1号棺 鉄鏃出土状況



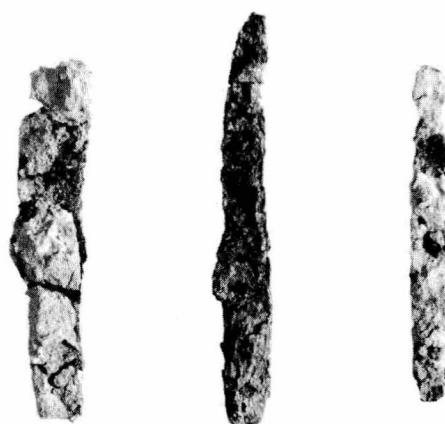
(2) 昭和42年 出土 鉄 鏃



(1) 昭和42年 出土 鉄鏃

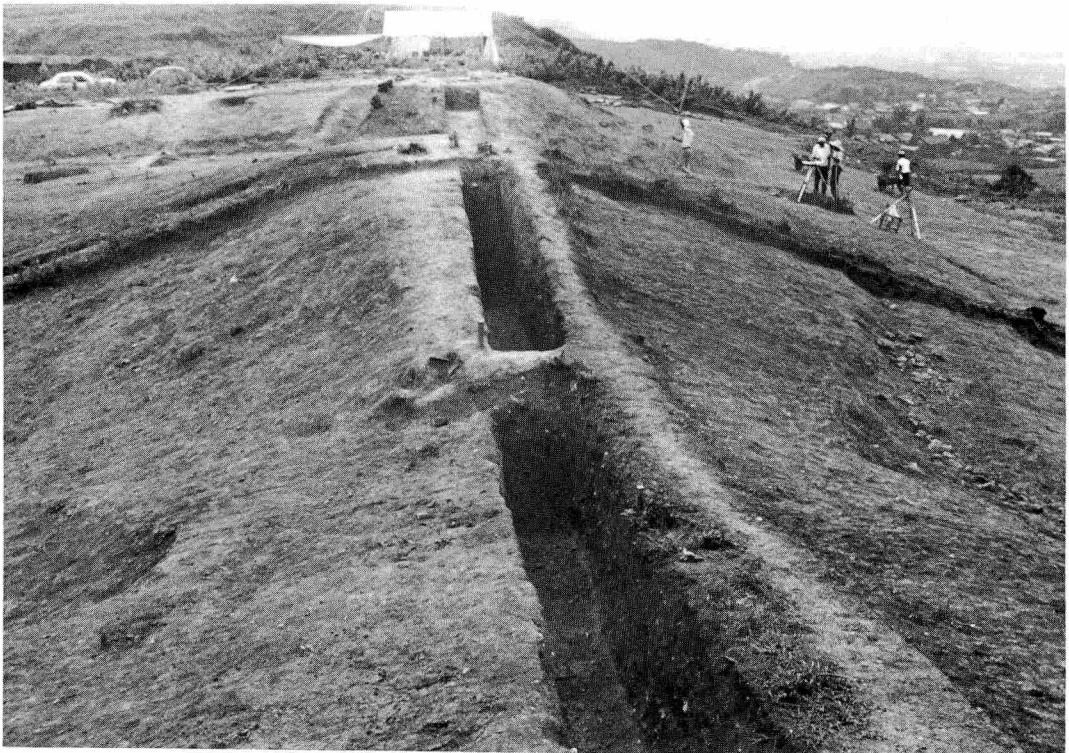


(2) 同上、直刀、剣



(3) 同上、刀子

図版 8



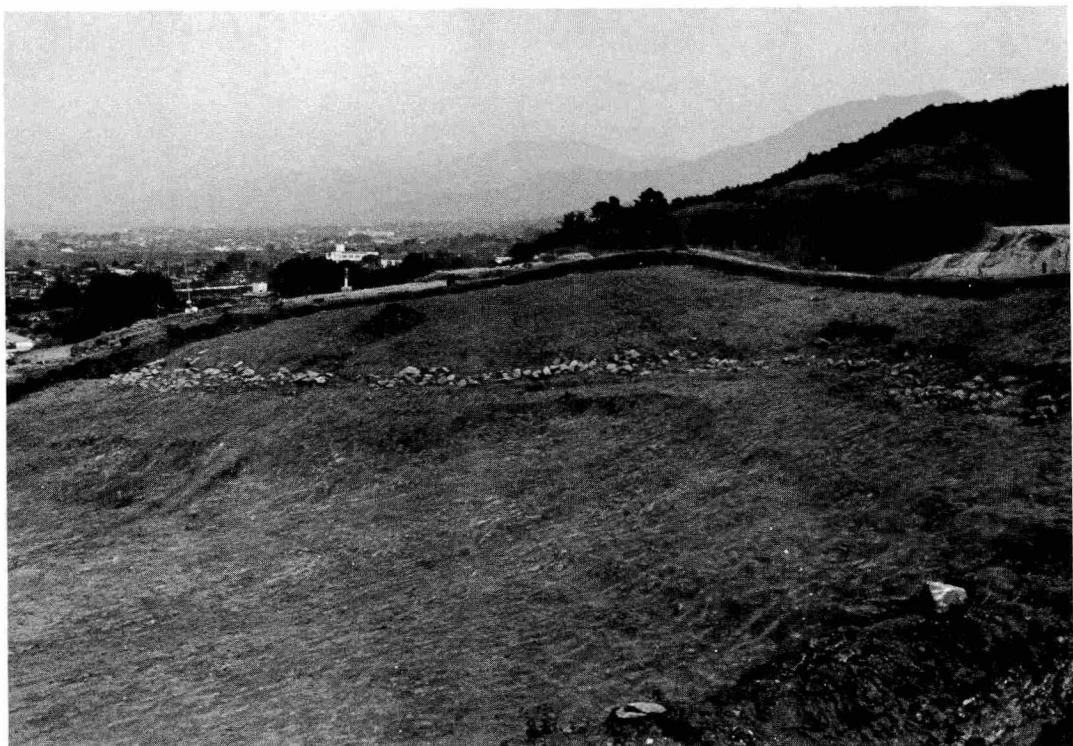
(1) 2号墳東西トレンチ状況（東方より）



(2) 同上



(1) 2号墳北斜面 葦石状況（西方より）



(2) 同上（北方より）

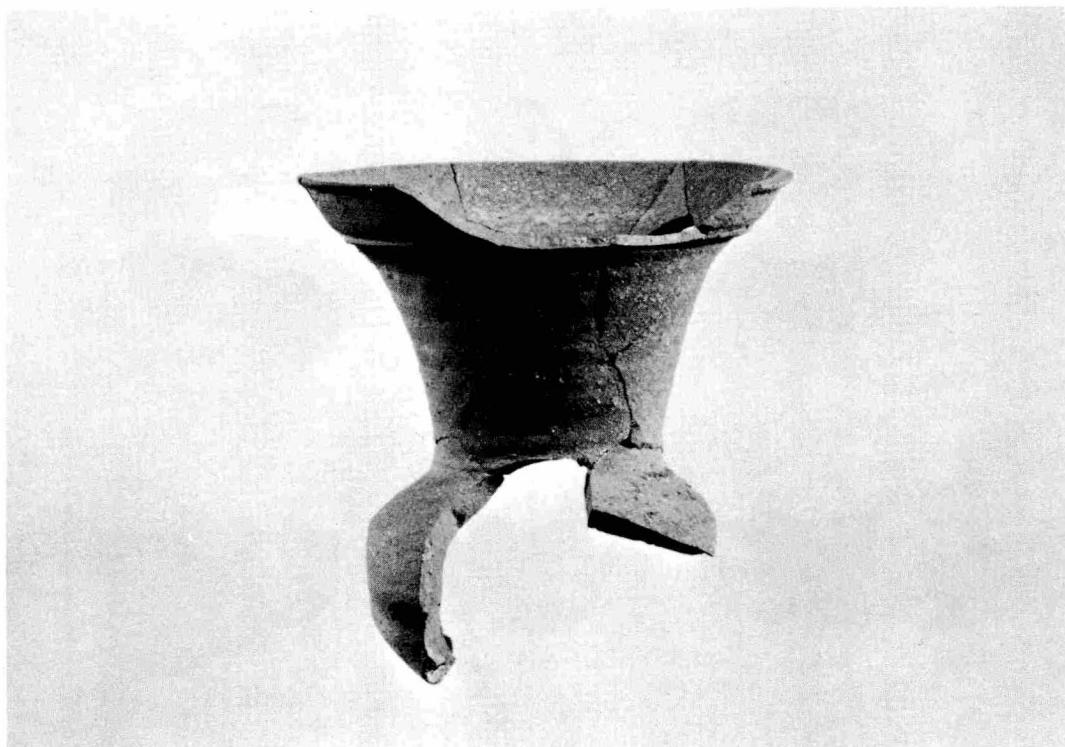
図 版 10



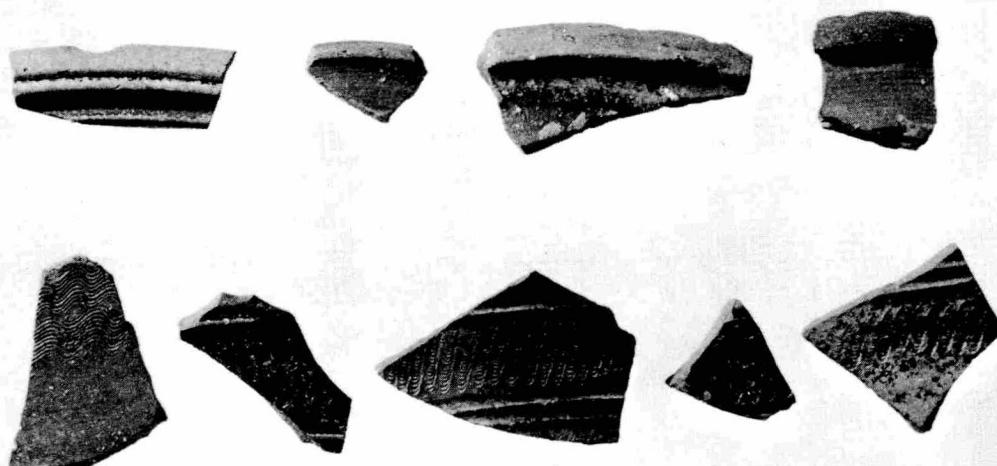
(1) 2号墳 南斜面くびれ部付近 遺物出土状況（南方より）



(2) 同上、須恵器出土状況

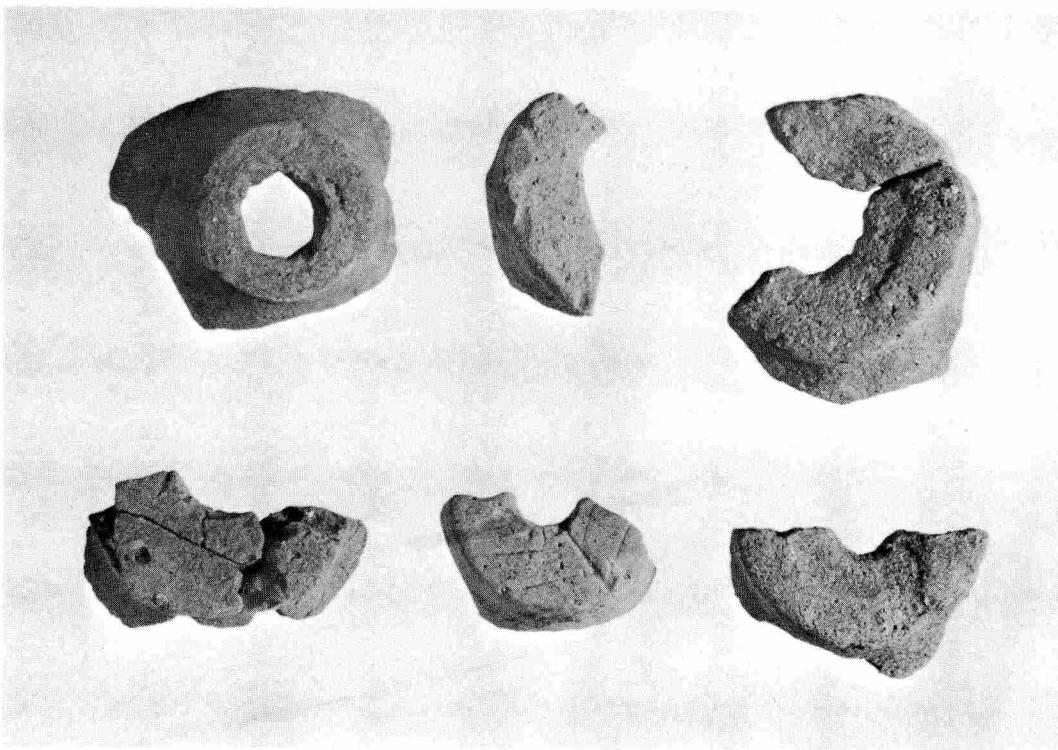


(1) 2号墳出土 銚

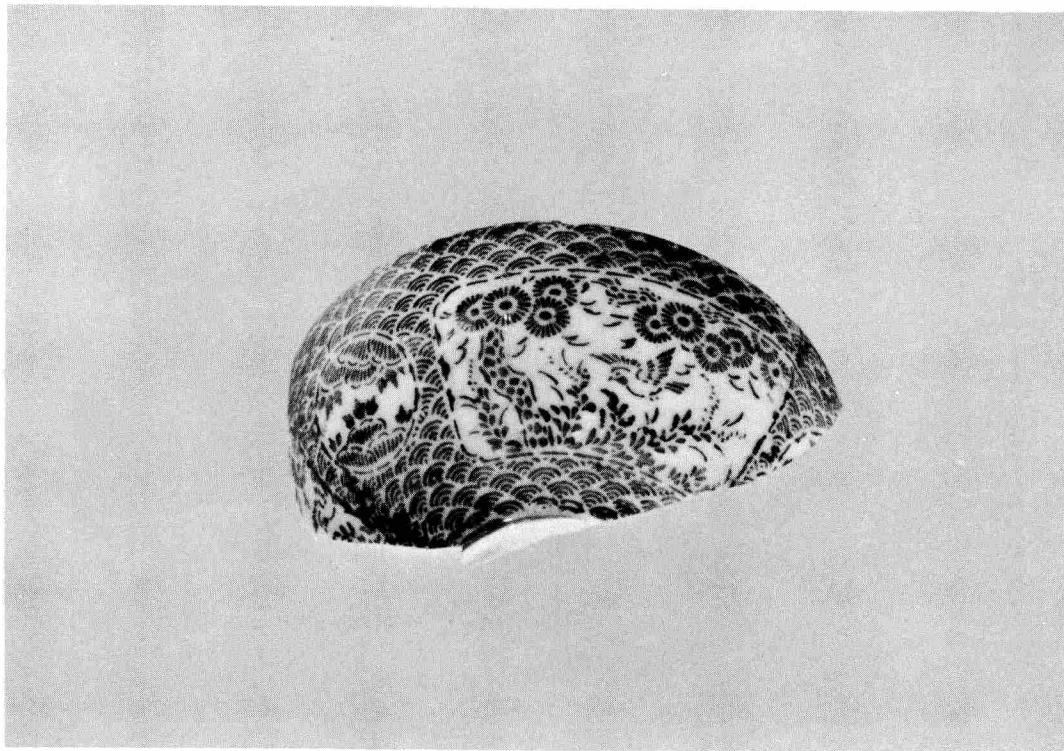


(2) 同上、甕

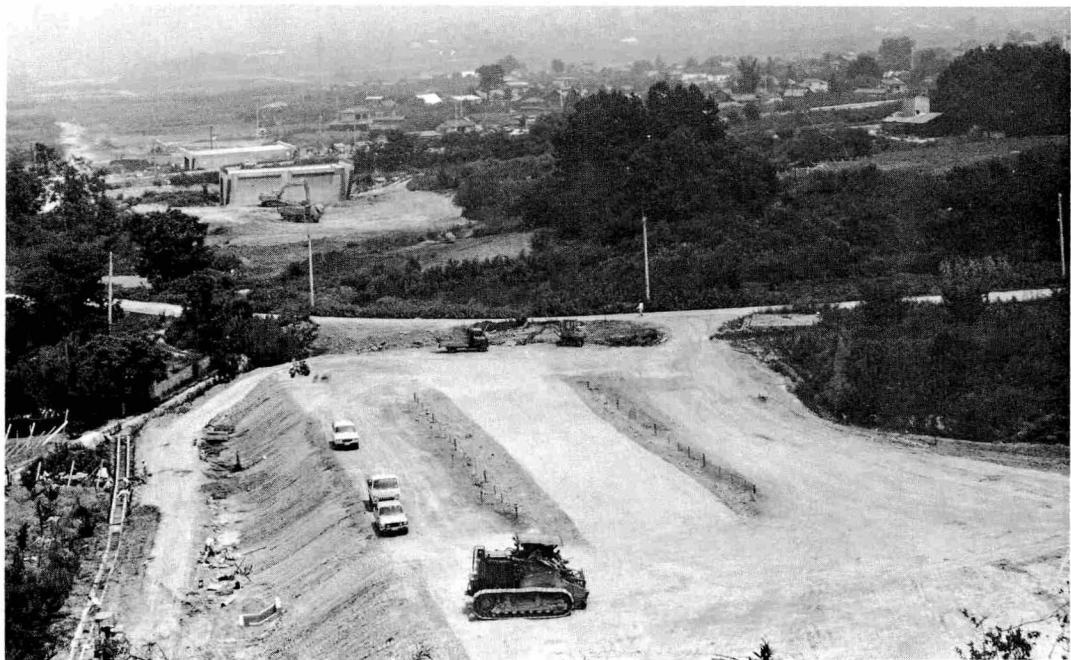
図 版 12



(1) 2号墳出土 底部穿孔土器



(2) 同上、茶碗



(1) 口開遺跡遠景
(西方より)

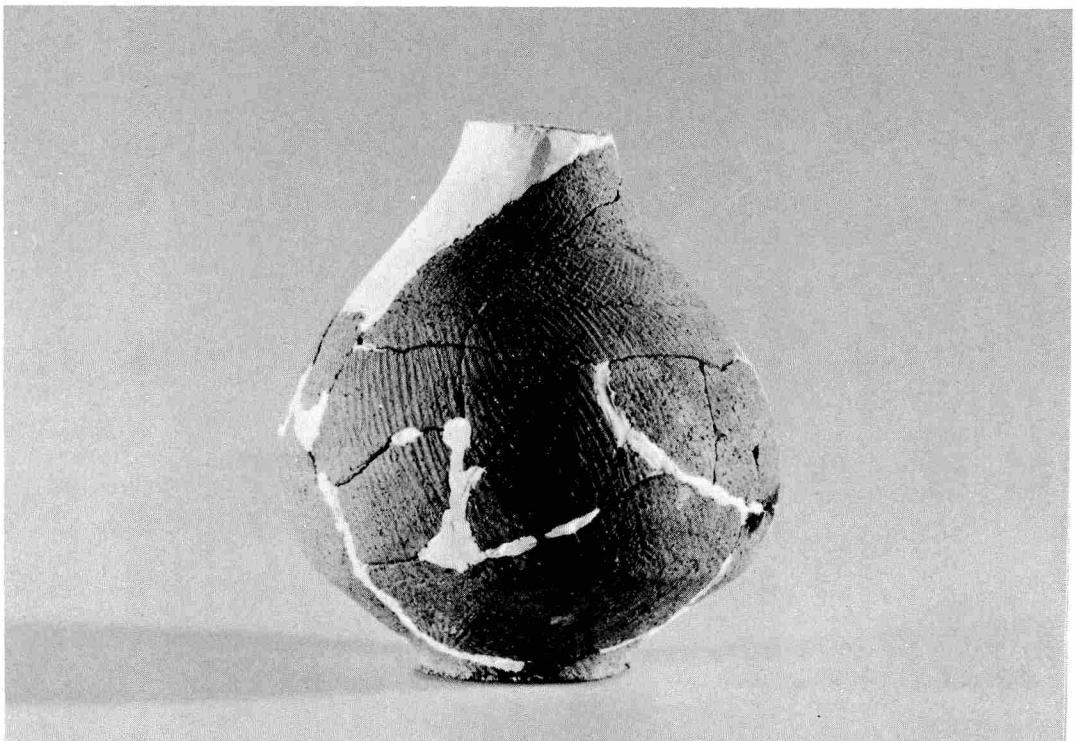


(2) 同上、方形周溝状遺構

図版 14



(1) 方形周溝状遺構遺物出土状況



(2) 同上、壺

昭和60年3月25日 印刷
昭和60年3月30日 発行

八乙女塚古墳(馬乗山1号・2号墳)・口開遺跡

山梨県中央自動車道
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

山梨県埋蔵文化財センター
調査報告 第5集
発行所 山梨県教育委員会
日本道路公団

印刷所 ヨネヤ印刷
甲府市丸の内一丁目14-6

